

# 信長の鎮守府

Mr. tosi

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

艦これのプレイ日記です。

信長の忍び風な日常パロディです。

# 目 次

信長が鎮守府に着任しました。	—	佐世保の艦娘達	—	守府！	—
攻略艦隊壊滅？	—	突撃！隣のブレイブウェイツチーズ！	—	このハゲー！！	—
由良は鎮守府のお姉さん	—	作戦!!	—	もはや声ネタである。	—
ツツコミ師と坊ちゃんが着任しました	—	信長最大の危機!?西方再打通！歐州救援	—		
が、邪魔なので返していいですか？	—	364	364	276	276
93	53	67	29	12	190
提督会議開催	—	146	146	243	243
食戟の比叡	—	127	127		
出撃！北東方面 第五艦隊!!ヒミツの鎮	—				



信長が鎮守府に着任しました。

西暦2013年3月。

信長

「ん？珍しいな。幼子一人水練とは。」

吹雪

「溺れるんです!!」

信長と吹雪の物語はこの頃から始まつていた。

信長

「ここでは見ない顔だな。何処の町の娘だ？」

2 信長が鎮守府に着任しました。

吹雪

「私一般人じゃありません。『艦娘』です。』

信長

「艦娘？ 艦娘とは珍しいな。」

吹雪

「よく『田舎のイモ娘』って間違われるんです。」

信長

「いや、艦娘の癖に溺れてる艦娘。」

吹雪

「わかってるなら言わないで下さい!!」

当時の彼女はまだ初期艦見習いの訓練兵だつた。

信長

「なるほど。貴様は鎮守府立ち上げで最初に着任する艦娘なのだな？」

吹雪

「はい！初期艦として立派な艦娘になるために頑張っているんですよ！」

信長

「ほう感心だな。」

吹雪

「今年の3月いっぱいまでに・・・。」

信長

「卒業間近でまだ溺れてるの!?」

吹雪

「もう留年決定です。」

4 信長が鎮守府に着任しました。

落ちこぼれだつたらしい。

吹雪

「あの。信長さんもいつかは何処かの鎮守府に配属になるんですよね。」

信長

「そうだ。運営側が手をこまねいでいるから、いつまで経つても戦乱の世が終らぬのだ。ワシの夢はただ一つ。この戦争を終わらせる事だ。」

『信長の野望』はここから始まった。

信長

「これ『艦隊これくしょん』だぞ！」

失礼しました。

吹雪

「あつ！そろそろ集合時間だ。行かなくちゃ！」

信長

「待て。濡れた髪がうつとうしかろう。」

この髪留めは信長と吹雪の絆の物となつた。

信長

「ではさらばだ。」

あれから月日は流れ。西暦2015年4月。

吹雪

「初めまして司令官！吹雪です！よろしくお願ひします！」

## 6 信長が鎮守府に着任しました。

信長

「うむ。此度この鎮守府に着任することになった織田信長だ。よろしく頼むぞ。」

吹雪

「ところで司令官。一つお聞きしてもいいでしようか?」

信長

「ん?なんだ?」

吹雪

「(ここ)舞鶴じやなくて佐世保ですよ?」

信長

「いや名字と名前が一緒だからって信長キャラで押し通るつもりは無いぞ。」

ちなみに彼の配属先は『佐世保』である。

信長

「ところで吹雪。ここは司令室で間違い無いんだな?」

吹雪

「そうですよ! それがどうかしましたか?」

信長

「いや。ダンボールしか置かれていないんだが?」

吹雪

「上層部の話ですと家具は現地調達とのことです。」

信長

「現地調達!?」

8 信長が鎮守府に着任しました。

吹雪

「なんでも鎮守府を立ち上げた提督は形から入るのが運営側の習わしだそうです。最初から。」

信長

「いやだからってダンボールは手抜き過ぎだろ!!」

艦隊これくしょんを初めてプレイされる提督さんは皆共通である。

信長

「まあいい。吹雪よお前がワシの下に着いたからには覚悟するがいい。お前はワシの為に働き、ワシの為に死ね。」

吹雪

「あっ！それは無理です。」

信長

「ワシすゞいこと言つてゐるのに良くあつさり断れるな。」

吹雪

「私達艦娘は、司令官と絆を結ぶ事で強くなれます。もし私達が轟沈すればそれは司令官の信頼と期待を裏切ると同じ行為なんです。無事に司令官の元に帰投する。それが私達艦娘の誇りなんです。」

信長

「そうか。ならば改めて先発言を訂正する。特型駆逐艦『吹雪』、ワシの為に生きろ！」

吹雪

「はい！司令官！」

信長

「しかし、二年ぶりか。まだワシがやつた髪留めをしているとはな。」

吹雪

「お・・・・覚えててくれたんですか。」

信長

「なんだ？泣き虫な所は相変わらずだな。」

吹雪

「はい！あとギリギリの成績で今年卒業出来ました！」

信長

「アニメ版の吹雪より酷いぞお前。」

さらに月日は流れ。 2017年現在。

大淀

「提督！『第五遊撃部隊』只今帰投しました！」

吹雪

「司令官！大井さん、北上さん、瑞鶴さんが途中で大破して帰投しました！」

信長

「わかつたからその格好で報告しに来るなあああ！！」

つづく。

# 佐世保の艦娘達

佐世保鎮守府には、約140隻以上の艦娘を所有している。

吹雪

「司令官。私と長門さんどちらを選ぶんですか？」

信長

「いや・・・それはだな。」

長門

「いい加減に決めてくれないとこちらも困るのだが？」

信長

「わかつたから腕をポキポキ鳴らすな。」

だが未だ『ケツコンカツコカリ』をしている者は誰もいない。ちなみに一番近いのは吹雪と長門である。

大淀

「提督。今月のご予定はいかがしましよう。いつものデイリー任務は変わりませんが、今後展開する海域を選択してください。」

信長

「いつもと変わらぬ。勲章狙いだ。今後は設計図を集める事に専念する。」

大淀

「わかりました。オール『鎮守府近海航路』ですね。」

信長

「ワシの話完全無視か?」

彼女が鎮守府近海航路にこだわる理由、それはその海域で大淀がドロップ出来るからである。

信長

「では『鎮守府近海』の艦隊を発表する。『山城』『隼鷹』『夕張』『那珂』以上だ。」

山城

「不幸だわ・・・。よりもよつてこの編成で『対潜哨戒任務』なんて。』

隼鷹

「いやいつものメンツだけど?」

信長

「なお山城達が戻つて來た後、並行して『沖ノ島沖』は『長門』『陸奥』『大和』『武藏』『蒼龍』『飛龍』の編成で出撃する。」

山城

「不幸だわ。長門と武藏が一緒の艦隊なんて。」

プロレスラー戦艦 ガン黒戦艦

長門、武藏

「おい！」

ちなみにこここの鎮守府の戦艦達は仲が悪い。

長門

「山城！貴様今プロレスラーとか言つたか!! 陸奥はプロレスラーでは無いぞ!!」

陸奥

「プロレスラーはあなたよ長門。」

信長

(陸奥はどちらかと言うと『ビツチ戦艦』か?)

武藏

「全く！大和のどこがガン黒なんだ!!」

大和

「ガン黒はあなたよ武藏。」

信長

(大和はどちらかと言えば、ホテルより豪華客船だな。『タイタニック』的な。)

大淀

「そうなると『三日月』さんがホテルになりますね。」

信長

「ん？何か言つたか大淀。」

大淀

「いえ別に。」

信長

(こやつ今ワシの心の声を聞いてたのか?)

大淀

「聞いていました。」

信長

「やめんか! 気持ち悪い!!」

『大淀』は連合艦隊総旗艦使用に建造されてるため、艦娘達の噂話は勿論の事、提督の心の声も聞こえるのだ。

信長

『鎮守府海域』と『南西諸島海域』の作戦を完遂後、『北方AL海域』とある島を攻略する。』

吹雪

「ある島?」

信長

『カレー洋リランカ島沖』だ（今夜カレーにしよう）。

大淀

「提督。作戦名で今夜のメニュー決めるのやめてもらえますか。」

信長

「一々人の心を代弁するな。」

隼鷹

「提督。カレー洋だからカレー食べたくなつたとかそんなオヤジギヤグいらないから。」

信長

「わかつてゐなら掘り返すな恥ずかしい。」

けど気持ちはわからなくもない。

信長

「なお『北方AL海域』の艦隊を一部編成する。元々演習艦隊だつた『第五遊撃部隊』から『瑞鶴』を外し『赤城』を加える。」

北方AL海域は、元々演習艦隊だつた第五遊撃部隊『吹雪』『金剛』『北上』『大井』『加賀』『瑞鶴』が攻略に当たつていたが、ある事が理由で瑞鶴と赤城を交代せざるおえなくなつた。

瑞鶴

「なんで今更私を外すの!!」

信長

「瑞鶴。」

瑞鶴

「提督がアニメ艦隊これくしょんのマネなんかして第五遊撃部隊立ち上げたけど、正直最初は乗り気はしなかつた！けどみんなと一緒にいるうちに楽しくなつてた！加賀さんに怒られたり、加賀さんにどやされたり、加賀さんに嫌味言われたり！」

信長

「それ楽しかったのか？」

瑞鶴

「私が作戦中に大破した時加賀さんに「あなたまた大破したの？いい加減にしてくれない？」って冷たい目で言われた時だつてあつたわよ!!」

信長

「お前もう少し後輩に優しくしろよ。」

加賀

「事実を言つたまでです。」

瑞鶴

「だから私も加賀さんが大破した時「先輩また大破ですか？いい加減にしてください。」とか冷たい態度で言い返してたわよ!!」

信長

「そんな関係で良く作戦遂行できてたな。」

瑞鶴

「なのに・・・・なんで私と同じ正規空母の赤城さんと交代しなきやいけないのよ!!」

信長

「ん？瑞鶴。今自分の艦種が何なのかわかつてるのか？」

瑞鶴

「だから正規空母だつて言つてるでしょ!!」

信長

「装甲空母だぞ。お前。」

瑞鶴

「え？」

翔鶴と瑞鶴は改二にした後さらにlevelを上げると装甲空母に改造できるのだが、そこには度重なる困難と涙とドラマとその達成感の喜びがあつたにも関わらず、彼女忘れてたみたい。

瑞鶴

「やべすっかり忘れてた。あつ！もしかして私が艦隊から外れた理由つて装甲空母だとボスマスに辿り着けないから？」

加賀

「今頃気付きましたか七面鳥。」

瑞鶴

「うるさいわね！」

隼鷹

「少しは反省しなよ。結構苦労したんだから。」

信長

「全く。怒りを通り越して呆れたわ（この女子高生空母!!あれ程苦労して改造したのに  
もう忘れてたのかあ!!）。」

大淀

「瑞鶴さん。提督はこう仰っていますが「この女子高生空母!!あれ程苦労して改造した  
のにもう忘れてたのかあ!!」と怒っています。」

信長

「いい加減人の心を詠んで代弁するなあ!!」

瑞鶴

「えつ!? マジ!?

信長

「マジだよこの女子高生空母!!」

瑞鶴

「誰が女子高生空母よこの殿様提督!!」

もはや子供のケンカである。

翔鶴

「やめなさい瑞鶴。」

瑞鶴

「翔鶴姉。」

翔鶴

「加賀さんや赤城さんは一航戦の正規空母。私達よりも力は上なのよ。」

瑞鶴

「でも！」

翔鶴

「いい？ 私達が装甲空母に改造できたのも、全て無能で役立たずの先輩達のお陰な  
よ。」

信長

(家の翔鶴アニメ版より腹黒かつた。)

もはや捨て台詞である。

信長

「よいか瑞鶴。ワシがお前や翔鶴を改造したのは『大鳳』の負担を減らす事と、お前達の集中強化が目的だつた。お前達がその姿になれたのはお前達の日々の努力とワシを始めここにいる多くの艦娘達の協力があつて存在できた事を肝に命じておけ。いいな！」

翔鶴、瑞鶴

「はい!!」

信長

(コンバート改造で正規空母にも戻せるが、後々面倒だ。資源の減りも早いし二人にはこのまま装甲空母でいてもらおう。)

大淀

「コンバート改造で正規空母にも戻せるが、後々面倒だ。資源の減りも早いし二人にはこのまま装甲空母でいてもらおう。」と提督は仰っています。

信長

「仰つてもいませんし、思つてもいない!!」

隼鷹

「提督いろいろ台無しだよ。」

全くである。

信長

「なおりランカ島沖の編成は『大和』『武藏』『摩耶』『鈴谷』『熊野』『葛城』に出撃して  
もらう。大淀。」

大淀

「はい。軍議の結果、今月は鎮守府近海の対潜哨戒任務終了後、オール鎮守府近海航路で  
大淀ドロップ作戦を行う事に決まりました。」

信長

「大淀の話無視して全艦出撃!!」

お  
わり

# 攻略艦隊壊滅？

西暦2017年1月。鎮守府近海と沖ノ島沖の攻略艦隊が出撃した。

吹雪

「鎮守府近海と沖ノ島沖は順調ですね。」

信長

「・・・・。」

だがこの時、信長は何も答えなかつた。

大淀

「吹雪さん。提督どうかしたの？」

吹雪

「あつ！ 気にしないでください。」

信長

「間違えて『蒼き鋼の航海記』の原稿の下書き消しちゃった。なんと不覚!!」

大淀

「心配した私がバカだったわ。」

すると山城率いる対潜水艦隊が帰投した。

山城

「艦隊が帰投しました・・・。」

信長

「ご苦労。それで戦果は？」

山城

「余裕で攻略したに決まってるでしょ！ 鎮守府の古株舐めんじやないわよ!!」

大淀

「他の鎮守府の山城さんはみんなネガティブなのに家はなんでこんなにポジティブなの？」

吹雪

「さあ？」

隼鷹

「余裕過ぎて退屈だつたよ。」

信長

「隼鷹。貴様サボつていたら？」

隼鷹

「何言つてゐの！ちゃんと仕事してきたよ!!」

吹雪

「隼鷹さん。お酒の匂いがここまでしますよ。」

隼鷹

「だつて退屈だつたんだもん。」

信長

「お前な。」

隼鷹

「だから酒が無くなつたからさ！酒取りに一時艦隊から外れて沖縄まで買い出しに行つてた！」

大淀

隼鷹

「そしたらまたま『スター・ライト学園』の『黒沢凜』ちゃんに会つてね！提督の土産が  
てらサイン貰つて来ちゃつた!!」

那珂

「あつ！実は仕事が終わつた帰り道に那珂ちゃん達も沖縄に行つたら『ドリームアカデ  
ミー』の『音城セイラ』ちゃんに会つてサイン貰つて来ちゃつた!!」

信長

「隼鷹・・・。那珂・・・。貴様等あああああああ!!!」

夕張

「ちよつとヤバくない!?さすがに提督メチャクチャ怒つてるわよ!!」

山城

「いいえ。寧ろ逆よ。」

「え？」  
夕張

信長

「でかしたあ！ 褒美を遣わすぞ!!」

隼鷹、那珂

「ありがたき幸せ！」

山城

「提督が怒鳴り声を上げる時はメチャクチヤ喜んでる時なの。」

「紛らわしいんだけど。」

夕張

信長は『アイカツ！』の黒沢凜と音城セイラの大ファンだった。

嵐

「誰だ!! 提督を怒らせたバカヤローは!!」

山城

「そこのバカ二人だけど?」

嵐

「隼鷹さんと那珂さん? なんかメッツチヤ褒められてますよ?」

夕張

「やつぱり勘違いしますって!」

嵐

「つて! そんな事してる場合じゃないんですって!!」

山城

「なに？ 提督の怒鳴り声で駆けつけたんじゃないの？」

信長

「その件では無かろう。何があつたか申してみろ。」

嵐

「長門さん達の艦隊が帰投したんだ。」

信長

「ほう？ 予定より随分と早いな。それで戦果は？」

大和

「提督……。」

そこには、『由良』と『矢矧』に担がれている大破した大和と長門の姿を目の当たりにした。

山城

「随分と派手にやられたわね。しかも旗艦大破で帰投とは。」

長門

「我ながら不甲斐ない。」

信長

「構わぬ。そう生易しい海域でない事は承知の上だ。報告は後にして早く入渠するがよい。」

長門

「提督よ・・・。」

大和

「そうしたいのはやまやまなんだけど・・・。」

長門、大和

「全艦大破してドッグが開いていません。」

信長

「はいいいいい!?」

その報告を聞いた信長は驚いていた。

信長

「全艦大破だと!まさか貴様等・・・間違えて鉄鋼海峡アイアンボトムサウンドまで行つて来たわけではあるまいな!!」

大和

「なんでそんなどこまで行かなきやいけないんですか？」

信長

「いや劇場版の聖地だし？劇場版の大和のマネ事して大破状態で戦艦棲姫を撃沈したのではないかと。」

大和

「いや。劇場版のは損傷が酷く演出されましたが中破扱いですよ？」

信長

「マジで？」

大和

「マジっす。でなきやこつちが轟沈します。」

信長

「わかった。蒼龍と飛龍に高速修復剤の手配をする。お前達二人はその後でゆっくり休むがよい。」

山城

「提督。高速修復剤後二人分追加ね。」

信長  
「は？」

夕張

「吹雪が隼鷹と那珂を大破させちやつて。」

信長

「ワシが目を離した隙に何があつた？」

吹雪

「あつ！申し訳ありません司令官。」

大淀

「これ燃やし終わつたらすぐ高速修復剤の手配をさせますので。」

信長

「ワシの音城セイラと黒沢凜のサインがああああああ!!!」

高速修復剤で復活した蒼龍、飛龍は事の出来事を報告しようとした。

信長

「・・・・・。」

信長の心は未だ大破したままだつた。

蒼龍

「提督。また明日にする?」

信長

「いや。今報告してくれ・・・・。」

蒼龍

「報告出来る状態じゃないから言つてるんだけど。」

だが二人の報告を聞いて信長は驚いた。

信長

「沖ノ島に『ネウロイ』だと!？」

嵐

「ネウロイって?」

大淀

「そう言えば嵐さんは入ったばかりでまだ知りませんでしたね? 良くあるんです。家に嫌がらせしてくるアニメ作品が。」

嵐

「『ストライクウェイツチーズ』すか!? なんすかそのご近所トラブル!？」

ちなみにストライクウェイツチーズ以外にもいろんなアニメキャラが参戦してくるぞ。

長門

「提督よ！ もはや一刻の猶予もない！ ネウロイを叩くぞ!!」

信長

「ちよつと待て！ お前等入渠の終わるの早くないか？」

長門

「全艦高速修復剤を使わせて貰った。」

信長

「ワシの許可も無く高速修復剤を使つたのか!?」

長門

「処罰は後で受ける。ネウロイ供を倒した後でな！」

信長

「なんと愚かなことを・・・。」

陸奥

「愚かでもいいわ！けど私達は悔しいのよ！」

大和

「お願いです！ネウロイ討伐作戦に参加させて下さい!!」

信長

「お前等な・・・。」

武蔵

「見苦しいぞ！それでも第六天魔王織田信長か！」

信長

「本人ではないがな。」

でもキヤラは『信長の忍び』の織田信長である。

信長

「お前達の熱意は伝わった。だがとんでもない過ちを犯したようだな。」

長門

「高速修復剤か。さつき言つた筈だ。ネウロイを倒した後で罰は受けると。」

信長

「いや。今すぐ大淀に土下座しないと大変な事になるぞ。」

長門

「は？」

大淀

「おい。そこの戦艦供。誰の許可貰つて勝手に高速修復剤使つてんだ?」

長門

「提督にだが?」

大淀

「そこのヒゲじやねーよ!! 私に断りなく何勝手に高速修復剤使つてんだ!? あれ集めるのにどれだけやり繰りして地道に節約してるかわかつてんのか!!」

※口調と性格は荒れてますが、間違いなく『大淀』本人です。

隼鷹

「ねえ提督。一部の読者から『神経団太い』って言われてるけど立場的には事務員なんだよね?」

信長

「まあ資源や資材、装備の管理は大淀が担当しているからな。怒るのも無理はない。」

大淀

「テメー等全員『まるゆ』の近代化改修<sup>エクサ</sup>にするぞコラア!!」

長門、陸奥、大和、武藏

「すいませんでした!!」

隼鷹

「さつき『口調と性格が荒れてます』って書いてあつたけど書き直した方がよくない?  
キヤラ変わつちやつてるよ?」

信長

「苦情来ないかこれ?」

大淀ファンの皆様。 大変申し訳ありませんでした。

大淀

「さて冗談はここまでにして。」

信長

(いや・・・本気だつたような?)

大淀

「如何しましよう。ネウロイの巣がある以上、沖ノ島沖攻略は困難かと思われます。」

信長

「艦娘では相性が悪すぎる。空からの攻撃に有効と言えば航空隊だが。」

蒼龍

「なら私達空母機動部隊の出番ですね！」

信長

「いやモビルスーツぐらいの兵器で無ければ勝てぬ。」

蒼龍

「提督。これ『艦隊これくしょん』。」

だがモビルスー<sup>ツ</sup>など必要と無くなる事態が起きた。

しおい

「艦隊帰投しました！」

長期遠征に出ていた『伊<sup>し</sup>4<sup>お</sup>0<sup>い</sup>1』『伊<sup>イ</sup>1<sup>ム</sup>6<sup>ヤ</sup>8』『伊<sup>イ</sup>1<sup>ク</sup>9』『伊<sup>ゴ</sup>5<sup>ヤ</sup>8』『伊<sup>ハ</sup>8<sup>チ</sup>』の潜水艦隊が帰投したのだ。

信長

「しおい達か。長旅ご苦労であつた。」

しおい

「提督見て見て！すごい子達連れてきたよ!!」

信長

「たち？」

信長は、以前からドイツ艦艇の艦娘を戦力投入させるため、潜水艦隊を長期遠征に出撃させていたのだ。そのドイツ艦艇一人が『Zレーべレヒト・マーク』1』なのだ。

ラル

「私が502隊長のグンドュラ・ラル。階級は少佐だ。よろしく頼む。」

サーシャ

「攻撃隊長のアレクサンドラ・イワーノヴァ・ポルクイーシキン。サーシャでいいわ。よろしく。」

クルピنسキー

「ヴァルトルート・クルピnsキー。中尉だよ。伯爵と呼んでくれるかな？司令殿。」

ロスマン

「エディータ・ロスマン曹長よ。ウイツチの教育係もしているわ。よろしくね。」

下原

「下原定子。少尉です。よろしくお願ひします。」

ジョゼ

「ジョーゼット・ルマールです。よろしくお願ひします。」

ニパ

「ニッカ・エドワード・カタヤイネン。ニパでいいよ。」

菅野

「俺は菅野直枝だ。よろしくな提督！」

ひかり

「雁淵ひかりです!! よろしくお願ひします!!」

ラル

「第502統合戦闘航空団『ブレイブウイツチーズ』。本日付で佐世保鎮守府に配属となりました。」

信長

「なんかスゲーのキタアアアアアア!!!」

つづく

# 突撃！隣のブレイブウイツチーズ！

前回までのあらすじ。

何故かブレイ日記で話を進めていた艦隊これくしょんなのに、突如ブレイブウイツチーズが鎮守府に乱入してきた。

信長

「で？ 第502下半身露出狂変態集団ブレイブウイツチーズが我が鎮守府になんの用だ。」

ラル

「鉛玉ぶち込まれたいのか？」

そして現在に至る。

ラル

「我々がここに来た目的は既にそちらで察しがついていると思うが。」

信長

「デリヘル?」

ラル

「鉛玉ぶち込んでもいいか?」

大淀

「蜂の巣にして下さい。」

銃声が乱射する司令室だつたが、信長は「こちとら謀反慣れしとんのじやあ!!」と叫びながらかわし続けた。

信長

「貴様等502が来た目的は沖ノ島に発生したネウロイの巣と言ふことは把握している。だがちょうどいい。お前達ブレイブウェイツチーズの力、存分に使わせて貰うぞ。」

蒼龍

「ラル隊長！闇雲に打つても提督には当たりません！私達二航戦と連携して提督を追い込みます！」

ラル

「頼むぞ蒼龍。」

大和

「弾着観測射撃で当たらないなら三式弾で攪乱させて提督が怯んだところを！」

長門

「私と菅野のダブルスマッシュで留めを刺す！」

菅野

「ワンパンで終わらせてやるぜ!!」

信長

「遊んでないで軍議に戻らんかあ!!」

艦娘&ウイッヂ

「ドリフターズごっこしてたお前が言うかあ!!」

軍議は難航していた。

信長

「ブレイブウィッヂーズと我が鎮守府の支援艦隊でネウロイの巣を撃破後長門率いる主力艦隊を進行させる。」

吹雪

「司令官まさか!」

信長

「ネウロイと深海淵艦を沖ノ島ごと焼く。」

大淀

「ふつくらこんがり焼き上げなくていいです。」

信長

「ではカリツと香ばしくの方がいいか?」

大淀

「いいえ。灰にしてください。」

信長

「お前ワシより容赦ないな。」

一月末、沖ノ島沖の攻略艦隊が出撃した。布陣はブレイブウェーブチーズを始め、一航

戦を赤城を旗艦とし、加賀、祥鳳、瑞鳳、初月、皐月の支援艦隊である。

大淀

「敵重巡リ級大破！」

白雪

「近いわね。」

吹雪

「ああ。」

ついに、敵聖地に向けての犯行作戦が開始されようとしていた。ちなみに皆さん気づいているかと思いますが佐世保鎮守府の秘書艦は吹雪です。

吹雪

「敵聖地の発見を優先!! 近いぞ!!」

58 突撃!隣のプレイブウィッヂ!

叢雲

「あんたいつまでアニメの長門さんの真似してるわけ?」

吹雪

「だつて一回言つてみたかつたんだもん!」

叢雲

「本人が聞いてたら怒られるわよ?」

吹雪

「大丈夫! プロレスラー今試合中だし!」

長門さん

出撃

叢雲

「あんた長門さんのこと嫌いでしょ?」

そのころ攻略艦隊は、沖ノ島のネウロイの巣付近にまで來ていた。

祥鳳

「行きますよ第二次攻撃隊。発進!!」

大淀

『あつ! 祥鳳さん翔鶴さんより伝言です。「アニメ版の私の真似してたら爆撃しますから。』とのことです。』

祥鳳

「もうやつてしまつたんですけど!!」

作戦が難航している中、司令室では信長としおいが重大な話をしていた。

信長

「しおい。先程から気になつていたが、乙一はどうした?」

しおい

「いつけね！わすれちつた！」

信長

「もう一回行つてこい!!」

その時、作戦室にて動きがあつた。

大淀

「祥鳳より入伝！ネウロイの巣撃破とのことです!!」

吹雪

「いよいよか。」

白雪

「どうするの？」

吹雪

「提督の意志は決定済みだ。」

長門達主力艦隊がしょボイントに突入した。

吹雪

「502と支援艦隊には帰還命令!同時に主力艦隊を突入させる!打って出るぞ!!」

大淀

「主力艦隊の長門さんより入電。『いい加減にしないと鉄鋼海峡に沈める』との事です！」

吹雪

「長門さんに入電!『アニメ艦隊これくしょんのヒロインに偉そうな口を叩くな!主役はこの私特型駆逐艦吹雪なんだから!!』と!」

大淀

「ぶつちやけお宅らの会話めんどいんで、回線開きっぱなしにしてます！」

長門

『こつちはアニメの方じゃ私が秘書艦やつてるんだよ!!その席私に寄越せ!!』

吹雪

「誰が試合中のプロレスラーなんかに渡すもんですか!!さつさとタ級に筋肉バスターして倒して下さい!!」

長門

『誰が筋肉マンだ！田舎のイモ娘!!』

大和

『長門さんが筋肉バスターでタ級を轟沈しました。』

信長

「何をしとるんだあいつらは？」

叢雲

「知らないわよ。」

無事作戦は成功した。

信長

「お前達のおかげで沖ノ島を取り戻す事ができた。礼を言う。」

ラル

「構わん。上層部の命令に従つただけだ気にするな。」

信長

「なら早いとこ『ペテンブルグ』に戻るが良い。『カールスラント』のネウロイの巣はお前達でなければ攻略できぬ。」

ラル

「そうさせて貰おう。ところであの二人は止めなくていいのか？」

長門

「寄越せ！」

吹雪

「嫌だ！」

長門

「寄越せ！」

吹雪

「嫌だ！」

信長

「勝手にやらせておけ。」

つづく。

# 由良は鎮守府のお姉さん

一月中旬。思いも寄らぬ事態が起きた。

艦娘達

「提督が鎮守府に着任できない!?」

信長が鎮守府に来れなくなつていた。

大淀

パソコン

「なんでも提督のパソコンが故障したらしく、鎮守府に着任する事が不可能な状況となり、今後の作戦展開が困難になつてている状態です。」

長門

「修理にはどれくらいかかる?」

大淀

「約4週間とのことです。」

長門

「1ヶ月か。」

隼鷹

「どうするの? 大规模作戦

「それまでに着任出来なければ今回の大規模作戦

「それまでに着任出来なければ今回の冬イベン

長門

い。」

吹雪

「司令官とは連絡取れないんですか?」

大淀

「残念ですが、現在提督の所在が掴めていません。」

不安が募る艦娘達だった。だがその時、一通の通信が届いた。

信長

『ワシだ。』

今まで連絡が取れずにいた信長だった。

吹雪

「司令官！今何処にいるんですか!?」

信長

『五稜館学園だ。』

長門

「五稜館学園?」

大淀

「おいヒゲ。今女子校にいるだろ?」

艦娘達

「は?」

ちなみに五稜館学園は女子校である。

信長

『その話は置いといてだ。』

吹雪

「置いとかないで下さい。何ですか女子校つて?」

信長

『話進まんから後にしてくれ。』

信長から今後の命令が下された。

信長

『お前達艦娘の中から『提督代理』と『秘書艦』を決め、行動してもらう。  
冬イベン大規模作戦ト2017まではいつもの任務で構わん。』

大淀

『大淀ドロップ作戦』ですね。』

信長

『違うし、しつこいなお前も。』

翔鶴

「ところで提督。一つ質問が。」

信長

『何だ翔鶴。』

翔鶴

「なぜ女子校なんかに滞在してるのでしよう?」

信長

『ワシにもいろいろ事情があるのだ。』

翔鶴

「失礼しました。提督は私以外のメス豚<sup>女子</sup>供を口説くのに忙しいのですね?」

信長

『そんなことしてないし、挑発的な単語を載せるな!』

???

『隊長さん。 少しよろしいでしようか。』

すると謎の少女が艦娘達の前に姿を現した。

椿芽

『初めまして佐世保鎮守府の皆さん。『ファイフスフォース』チーム『アルタイルトルテ』のリーダー『美山椿芽』と申します。』

吹雪

「佐世保鎮守府秘書艦の特型駆逐艦吹雪です。」

携帯アプリゲーム『スクールガールストライカーズ』主人公『美山椿芽』は信長とは親しい人物なのだ。

椿芽

『隊長さんは私達ファイフスフォースが責任を持つて預かりますので、皆さんは安心して任務を実行して下さい。それではまた。』

信長

『おい切るのか！まさか切・・・。』

五稜館学園の通信が切れた。

吹雪

「全艦！五稜館学園に向けて出撃！！ 敵を一掃します！」  
メス隊供

艦娘達

「了解!!」

大淀

「お前ら落ち着け。」

提督不在の今、艦娘達で提督代理と秘書艦を決める為の会議を始めた。

吹雪

「長門さん。今回だけ秘書艦をお譲りします。」

長門

「なんだと!?!」

吹雪は、長年勤めていた秘書艦の席を長門に譲ろうとしていた。

長門

「どう言う風の吹き回しだ?」

吹雪

「私も大人気なかつたです。長門さんがあれだけ秘書艦を希望していたのに、意地を張つてあなたに譲ろうとしなかつた。だから今回は良い機会かも知れないつて思つたんです。」

長門

「吹雪・・・やつとわかつてくれたか。」

大淀

「いいんですか？一ヶ月間、吹雪さんにこき使われるんですよ？」

長門

「は？」

長門が秘書艦になるとすることは、吹雪が自動的に秘書艦から提督代理の権限を持つ事になる。

長門

「ちよつと待てえ!! なんでこいつが提督代理になるんだ!? おかしいだろ!!」

吹雪

「大丈夫です!! 長門さんはとつても頼りになる佐世保鎮守府最強の艦娘ですから（プロレスラーをこき使うだけ使って、最後はボロ雑巾のように捨てますから）！」

長門

「カツコが本音だろ!!」

吹雪と長門の喧嘩は今に始まつた事ではないが、艦娘達に不安が積もる一方だつた。

由良

「ハイハイ！一人ともそこまで。」

そこに一人の艦娘が名乗りを上げた。

由良

「これじやいつまで絆つてもキリがないから私が提督代理として皆さんを指揮をします。」

長良型軽巡洋艦四番艦『由良』。山城同様この鎮守府の古株にして軽巡洋艦で最初に着任した艦娘で、面倒見がいい。

由良

「では賛成の方挙手をお願いします。」

その為、艦娘達からは彼女の信頼があるので迷わず全員賛成した。

吹雪

「うん。確かにそうだね。」

長門

「悔しいがあいつなら任しても問題ないな。」

この二人ですら、由良に意見出来ないくらいである。

由良

「じゃあ次は秘書艦を決めましょう。誰かやりたい人はいる?」

長門

「ならこのビッグセブンに任せてもらおうか！」

吹雪

「ちょっと！なに抜け駆けしてるんですか!!」

長門

「いやさつき秘書艦を譲ると言つていたのでな。問題ないだろ？」

吹雪

「何言つてるんですか!!あれは長門さんをこき使う為に秘書艦に任命したんです！それ以外の理由なんて認めません!!」

長門

「大淀。私の図鑑のプロフィールを一部訂正してくれ。『吹雪<sup>バカ</sup>を殴り殺すのなら任せてもらおうか。』と。」

大淀

「出来るわけねーだろ。何怖い事言つてるんですか。」

だが由良は吹雪と長門を秘書艦にするつもりはなかつたようだ。

由良

「吹雪さんはずっと秘書艦やつてるから、ここらで気分を入れ替えて遠征に行つてもらいましよう。」

吹雪

「え? なんで遠征?」

由良

「長門さんはアニメでずっと秘書艦でしたから待機でいいですね。」

長門

「いやそれ私であつて私じゃないし。関係ないよね?」

由良

「だつてアニメじや威張るだけ威張つといて自分から出撃しなかつたじやないですか。」

長門

「そりやアニメじや秘書艦だからね。それに最終回は出撃してたよ。」

由良

「でもそれつて大和さんが攻略艦隊の指揮してるのを横取りしたような感じですよね？」  
大和さん怒つてましたよ。」

長門

「いや怒つてたのアニメ版の大和だからね。」

大和

「そうですね。DVDで見ましたがあれは流石に頭にきました。」

長門

「お前もか。」

由良

「いいですよね。お二人はアニメに出られて。私なんて比叡さんのミラーリングシステムのサポートぐらいでしか出でないのに。」

比叡

「由良？ それ艦これじやなくて別のアニメの大戦艦『ヒエイ』だよね？」

由良

「さらにその比叡さんは陽炎型駆逐艦の娘に座礁させられてるし。」

比叡

「またさらに別のアニメの大型直接教育艦『比叡』なんんですけど!!」

由良

「と言うわけでお二人は秘書艦やらなくていいですね？」

吹雪、長門

「あの納得できないんですけど？」

由良

「ね。」

吹雪、長門

「はい・・・。」

大淀

(たまにあの「ね。」が怖いのは気のせいかしら?)

由良

「秘書艦は榛名さんにお願いします。」

榛名

「はい！榛名でいいならお任せください！」

提督代行長良型軽巡洋艦四番艦『由良』と、秘書艦金剛型三番艦『榛名』を中心に、鎮守府の生活が始まつた。

その翌日。

山城

「艦隊が帰投しました・・・。」

由良

「お疲れ様。戦果はどうでした。」

山城

「ぶつちやけ提督が指揮してた時より楽に攻略できた。」

それからと言うのも、由良が提督になつて以降、艦娘達には大好評だつた。

そして月日が経ち、<sup>大規模作戦</sup>冬イベント<sup>大規模作戦</sup>2017当日。由良、榛名、霧島は信長の帰りを待つていた。

榛名

「提督……着任しませんでしたね。」

霧島

「もう冬イベント<sup>大規模作戦</sup>2017は始まつてます。提督代理。ご決断を。」

イベント開始時刻を過ぎても信長は現れる事はなかつた。そして由良は苦渋の決断をした。

由良

「現時刻を持つて予定していた冬イベント<sup>大規模作戦</sup>2017、偵察戦力緊急展開！『光』作戦の参

加を辞退・・・。」

信長

「今戻った！」

誰もが諦め掛けていたその時、信長が鎮守府に着任して來た。

由良

「提督さん！」

榛名

「提督！」

霧島

「よく戻られました！司令！」

信長

「今日修理を終えたと業者から知らせを受けてな、ヨドバシまで取りに言つていた。」

霧島

「あれ？ですがそれって司令が本業で働いている製造業のお仕事を終えてからですよね？それにしてはいつもと遅いような気もしますが？」

榛名

「確かに。平日ならヨドバシ寄つてもテレ東の子供向けアニメが始まる頃には鎮守府に着任してるので、パソコンPCの受け取りにそんなに時間が掛かったのですか？」

信長

「いやその後、劇場版『相棒』の夜間の部を観て『牛角』でメシ食つてたら遅くなつた。」

榛名、霧島

「こんな大事な日になに劇場版『相棒』観に行つてるんですか。」

イベント海域解放日だったこの日は、劇場版『相棒』の上映日だったのだ。

由良

「提督さん。お帰りなさい。」

信長

「やはりお前が提督代理を務めていたか。苦労を掛けたな由良。」

由良

「いいえ。提督さんが無事に戻つて来られただけでも由良は嬉しいです。」

信長

「心配を掛けた。だがこれから忙しくなるぞ！」

霧島

「既に作戦は上層部から発令されていますが、作戦開始は明日の正午になりそうです。」

信長

「バカを申せ。今夜には前段作戦を攻略するつもりだ。」

榛名

「ですが作戦会議は!?」

信長

「必要ない。阿武隈、鬼怒、吹雪、睦月、如月、夕立を呼んできてくれ。直ぐに出撃させる。」

大淀は直ぐに信長が指名した艦娘達を連れてきた。

信長

「これより『光』作戦の前段作戦を行なつてもらう。トラック泊地の偵察戦力を増派するための準備として物資を舞鶴湾に運んでもらう。」

阿武隈

「なるほど！だから『大淀ドロップ』作戦攻略艦隊の阿武隈達が選ばれたんですね！」

鬼怒

「なんか納得！」

信長

（こいつらの中で『輸送船団護衛』が『大淀ドロップ』作戦になつとる。）

輸送船団護衛作戦のプロである阿武隈達が選抜された。

信長

「これより偵察戦力緊急展開！『光』作戦を発令する!! 全艦！作戦海域に向けて出撃せよ  
!!」

2月10日。信長は冬イベ大規模作戦ント2017を開始した。

由良

「ところで提督さん。五稜館学園で何してたんですか？」

信長

「まあいろいろと……。」

榛名

「ではゆっくりと取調室で洗いざらい喋ってくださいね？」

信長

「いや……それは。」

由良、榛名

「ね？」

信長

「はい……。」

霧島

続  
く

「流石の提督も、二人の前では顔が上がりませんね。」

ツツコミ師と坊ちゃんが着任しましたが、邪魔なので返していいですか？

2月中旬。作戦はいよいよトラック諸島で行われる後段作戦まで来ていた。だがここで思わぬ事態が発生した。

信長

「どうなつている明石！何故間宮アイスが来ていない!!」

明石

「上層部に問い合わせていますが注文を受けてないの一点張りで、対応してもらえないんです!!」

信長

「なんだと!!それではワシの間宮アイスはどうなる!!」

大淀

「提督のじやなくて私達の間宮アイスです。」

間宮アイスが届いていなかつたらしい。

大淀

「提督。艦隊が帰投しました。」

現在、大規模作戦の後段作戦で『深海双子淒姫』を後一步まで追い詰めていた。だが伊良湖最中のみで高揚させていたためなかなか倒せない。

金剛

「ダーリンもう疲れたネ。間宮アイスと伊良湖最中で回復したいネ。」

現在攻略中の艦隊は第一艦隊に旗艦金剛を始め、比叡、榛名、霧島の四姉妹と、軽空母祥鳳、瑞鳳に、第二艦隊の阿武隈、大井、北上、鳥海、初月、夕立の水上打撃部隊の連合艦隊である。

信長

「なあ金剛。そのダーリンはいい加減やめないか？ワシ提督なんだけど？」

金剛

「NO！そんな堅つ苦しい関係はナッシングネ！タービンズみたいにカツプルな関係で接するネ！」

信長

「いやあつち民間商業。ウチ国家とはいえ正規軍。そこ間違えない。」

戦艦『金剛』は金剛型四姉妹の中で最後に着任した艦娘なのだが彼女が一番練度が高い。なんせ最近になつて、吹雪や長門と同じケツコンカツコカリの候補者になつた。

96 ツッコミ師と坊ちゃんが着任しましたが、邪魔なので返していいですか?

す。」

光秀

「お初にお目にかかります。本日佐世保鎮守府に配属しました明智光秀少佐でございま

司令室に二名の将校が入つて來た。

信長  
「通せ。」

「提督。例の将校二名到着しました。」

大淀

さらに今日は佐世保鎮守府に新たな将校が二名配属される事になった。

「何ですと!?」  
吹雪、長門

イヨク

「同じくイヨク・クジヤン少佐です！クジヤン家の名にかけて、信長様のために誠心誠意お仕えします。」

信長

「うむ、ワシがこの基地の司令官織田信長だ。お前達の働きに期待する。と言いたいが・・・なぜ縄で縛られてる？」

光秀

「こつちが聞きたいんですけど!!」

イヨク

「（）の艦娘達に挨拶したらいきなり襲いかかって来てこんなことに!!」

信長

「まあ名前で何となくそうしたくはなるのはわからなくはないが？」

光秀、イヨク

「なんでえ!?

信長

「とりあえず比叡、榛名、霧島。

いい加減その二人の縄を解いてやれ。」

比叡、榛名、霧島

「なんでえ!?

光秀、イヨク

「いやそつちがなんでえ!?

この二人が最初に挨拶したのは、大規模作戦イベント中に帰投した攻略艦隊の艦娘達で、かつたのは比叡、榛名、霧島だった。

襲いか

霧島

「私は反対ですよ司令！『謀反の明智光秀』と『邪魔者イヨク・クジャン』と言えば上層部でも悪名高いほど有名なのですから!!」

光秀

(上層部で変な二つ名付けられてる!?)

イヨク

(私邪魔者なの!?)

大淀

「そー！ツツコム時は声に出してハツキリ言う!!」

光秀、イヨク

「心の中読まれてたあ!?」

信長

「大淀。こいつらの心の中まで追求するな。」

ちなみにこの二人『信長の忍び』の明智光秀でもなければ『機動戦士ガンダム  
血のオルフェンズ』のイヨク・クジヤンでもないぞ。

イヨク

「本名、朽雀威翼くじやんいよくつていいます。」

信長

「どっちにしても変わらんな。」

見た目はイヨク・クジヤンです。

イヨク

「やめろ！パクリだと思われたらどうするんだ!!」

時既に遅し。

イヨク

「ですがご安心を！明智少佐は的確なツッコミで優秀です！きっと信長様のお役に立てるかと！」

光秀

「いや評価するところ違う！！」

信長

「よく来てくれた！ボケが多過ぎるんだ家は！」

光秀

「それでいいんですか！？司令！」

大淀

「明智少佐の言う通りですよ提督。」

光秀

「大淀殿もああ仰つてますし。」

大淀

「ツッコミ役は提督だけで充分です!!」

光秀

「いやそうじやなくて!!」

信長

「そだぞ大淀！」

光秀

「そうですよね！ツツコミなんて軍人の仕事じゃありませんよね!?」

信長

「この基地ワシ以外全員ボケだらけではないか!!一人で対応できるか!!」

大淀

「あんたもだろうがあ!!」

光秀

「どつちもどつちでしようがあ!!!」

イヨク

(やはり上層部に光秀殿をここに推薦して正解だったな!)

コメデイ小説なので仕方ない。

信長

「大淀。第二水雷戦隊を呼んでくれ。この二人に鎮守府を案内させる。」

大淀

「その後で大淀ドロップ作戦ですね?」

信長

「それイベントが終わってからでもいいか?」

光秀、イヨク

(大淀ドロップ作戦つて何!?)

由良

そして司令室に第二水雷戦隊の艦娘達が招集された。

「提督さん。第二水雷戦隊、全員集まりました。」

この第二水雷戦隊は、史実ではなく信長が独自に編成した艦隊である。

信長

「今日家に着任した明智光秀とイヨク・クジヤンだ。基地を案内させろ。」

由良

「わかりました。」

由良を旗艦に矢矧、夕張、朝潮、三日月、不知火を主力とした水雷戦隊である。

由良

「長良型軽巡洋艦四番艦の由良です。どうぞよろしくお願ひします。」

光秀

「明智光秀です。由良殿でしたか。お美しい。」

106 ツッコミ師と坊ちゃんが着任しましたが、邪魔なので返していいですか?

信長

「おい！家の由良に美しいなどと申すな！」

光秀

「申し訳ありません!!全然美しくありませんでした!!」

ゴツンツ!!

信長

「美しいところは訂正するな!!」

由良

「提督さん。なにも殴らなくとも。」

後に『謀反の明智光秀』から『苦労人の明智光秀』へと二つ名が変わった。

矢矧

「阿賀野型軽巡洋艦三番艦の矢矧よ。よろしくね。」

光秀、イヨク

(服装がエロい！オツパイでかい！谷間見えてる!!)

阿賀野型軽巡洋艦三番艦『矢矧』は、駆逐艦の指導も行なつてゐる艦娘で、とても厳しいと聞いている。その精神は彼女の先輩である川内型軽巡洋艦『神通』から、受け継がれている。

光秀

「ハツ！申し訳ありません!! 明智光秀と申します!!」

この時光秀は、咄嗟に彼女の手を握つたと言う。

光秀

「もももも申し訳ありません!!」

矢矧

「いい気配りね！嫌いじゃないわ！」

光秀

「え？・じゃあ・・・・差し支えなければ・・・・その胸揉んでもいいですか？」

イヨク

（なに言つてんだこいつう！？）

バシツ！

矢矧

「ツッコミがボケに回つてどうするの!!」

イヨク

(引つ叩いたはいいけどツツコムとこ違う!!)

バシツ!

大淀

「ツツコム時は声に出してハツキリって言つたじゃない!!」

イヨク

「だからなんで人の心が読めるの!?」

信長

「イヨク。大淀は総旗艦使用に建造された軽巡洋艦だ。その索敵能力と分析力の高さは、人の心をまでも読み取る事ができる。」

イヨク

「ここの大淀さんどんだけハイスペック!?」

元総旗艦ですから。

矢矧

「あと私の胸を揉みたいなら死ぬ覚悟はしといた方がいいわよ。そうよね? 提督。」

光秀、イヨク

(揉んだんかいいいい!!)

信長

(死にかけだがな。だが後悔はしていない!)

大淀

「こいつらセクハラで上に報告してもいいですか?」

矢矧

「いいんじゃない？ 事実だし。」

その後の話で信長は上層部に呼ばれたと言ふ。

夕張

「実装実験軽巡の夕張よ！ よろしくね！」

光秀

「イヨク殿。彼女今『夕張』と申しましたか？」

イヨク

「それがどうかしたのか？」

光秀

「それらしき物が何処にも付いてないのですが？」

イヨク

「言うな！ 現在『夕張市』は過疎化が進んでいる。彼女はそれを自らの身体で表現していくんだ。」

夕張

「誰の胸が過疎化してるって？」

光秀

「夕張殿。きつといつか活気的な胸になりますよ！だから元氣だして！」街

夕張

「ねえ大淀さん。『ダンスレイブ』なんて武器なかつたかしら？」

大淀

「あつても使わせませんよ。タービンズの一の舞にはなりたくないの。」

知らない方は鉄血のオルフェンズを見よう。

朝潮

「朝潮型駆逐艦のネームシップ朝潮です！」

光秀、イヨク

「よかつた！普通の子だ！」

朝潮

「普通じやないあなた方に言われたくありません!! 信長を裏切つて謀反を起こしたり、迷惑もいいとこです!!」  
司令官 クーデター

光秀、イヨク

「いやだから人違い!!」

朝潮は性格はきちんとしているのだが、眞面目すぎるので冗談が通じない時がある。

三日月

「睦月型駆逐艦十番艦三日月です。」

イヨク

「三日月!?まさか『鉄華団』のエースがこの鎮守府に!?」

三日月

「オーガスじやないんですけど。」

光秀

「そうですよ。『天下五剣』の一振りかもしれないんですから。」

三日月

「宗近でもないんですけど。」

光秀、イヨク

「じゃあ継続高校の?」

三日月

「それただのミカじゃないですか!!てかもうガンダムネタと刀剣乱舞ネタはやめて下さ  
い!!」

ちなみに機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズが放送されて以降、三日月はみんなか  
らミカと呼ばれている。

不知火

「不知火です。よろしくお願ひします。」

光秀、イヨク

「こちらこそ。」

不知火

「ところで、結局あなた方は変態なのですか？それともご本人なのですか？」

光秀、イヨク

「どつちも違う!!」

不知火に関しては謎が多いところがある。

由良

「ではお二人さん。これから佐世保鎮守府の案内をします。私達の指示に従つて行動して下さい。それでは楽しい一時をどうぞ。」

光秀、イヨク

(何処の夢の国の案内係?)

その数時間後、二人がボロボロになつて帰つてきたのは、言うまでもない。

そして数日後、大規模作戦イベントの全てが終了した。

信長

「威力偵察とは言え呆気なかつたな。」

吹雪

「期日ギリギリでしたけどね？」

信長

「仕方ないだろ。間宮アイスが無くてみんな疲労状態で頑張つてくれてたんだから。」

吹雪

「結局、金剛姉妹から長門、大和姉妹に変えたら攻略出来ましたけどね？」

信長

「すまん。資源をケチつたワシがバカだつた。」

吹雪

「反省して下さい。」

簡単だつたのを調子に乗つて、資源を節約しようとした結果、期日ギリギリに攻略し

た信長だつた。

大淀

「提督。新たな艦娘が着任しました。」

信長

「通せ。」

今回のイベントで入手した艦娘達が着任した。  
大規模作戦

松風

「神風型四番艦松風だ。よろしく！」

信長

(ミニハット被つてゐる奴なんかプリキュアで見たような?)

秋津洲

「水上機母艦秋津洲よ！よろしくね！」

信長

(こいつが噂の弱すぎる水上機母艦か。)

朝雲

「朝潮型駆逐艦五番艦の朝雲よ。私冗談はあまり好きじゃないからー・そこのところよろしく。」

信長

(朝潮と同じか。)

天津風

「陽炎型九番艦天津風です。」

時津風

「陽炎型十番艦の時津風だよ！」

信長

(やつと劇場版に出てきた艦娘來たあああ！)

初風

「陽炎型駆逐艦初風よ。妙高姉さんに何かしたら許さないから！」

信長

(妙高Love?)

伊14

「伊十三番型潜水艦伊14だよ！よろしく！」

信長

(イムヤ以来にまともな潜水艦が入ってくれた。)

大淀

「提督。 ウザい。」

信長

(お前もな。)

この時信長はある事に気付いた。

信長

「お前はイムヤ達とは違つて番号なのだな?」

伊14

「そうだね? 伊号型は基本番号で呼ばれてるからね。」

信長

「それでは不便だ。 今日からお前は『イヨ』と名乗るがよい。」

伊14

「え？ いいの！？」

信長

「構わん。その方が周りも気楽に呼べる。潜水艦隊としてその働きに期待しているぞ。」

イヨ

「うん！ ありがとう提督！」

しおい

「じゃあ私イオナがいい！！」

信長

「どつから出て来てんだお前は！！」

しおい

「提督のデスクの下からだけど？」

信長

「なんでそんなとこに潜つてんだ!? てかお前のは別のアニメの401だろ!？」

この後しおいは、信長に殴られ執務室から追い出された。

松風

「ちなみに自慢じゃないがこれを見てくれ。」

松風から渡されたのは、艦隊これくしょんのコミック『いつか静かな海で』その三巻  
だつた。

松風

「終章を見てくれ。」

松風に言われるがままに終章を除いた。だがあるページを見て信長達は衝撃を受け  
た。

信長  
「これは・・・。」

光秀

「如何しましたか司令?」

信長

「お前達これを見てみろ。」

イヨク

「艦これの漫画ですか？一体何が？」

信長

「そこのページを見てみろ。」

「おや！駆逐艦達が神通殿の訓練を受けているようですね？松風殿もいます！」

光秀

イヨク

「松風殿が早く掲載されましたね。つい最近発売したなんですか？」

大淀

「いいえ。それ今回のイベント中に発売されたものですが？」  
大規模作戦

光秀、イヨク

「そうですか。イベント中について？ええええええ  
!!!!!!」

松風

「どうだい？ダンスレイブ並みの衝撃だつたろ！」

光秀、イヨク

「いやどちらかと言うとチョコレートを投げつけられたぐらいの衝撃だつた。」

松風

「キュアショコラじゃないんだけど?」

こうしてイベントは無事に終了したが、信長は次のイベントの準備に取り掛かっていた。  
大規模作戦

信長

「次の作戦に向けて戦艦『ビスマルク』の建造と育成を行う！各艦娘はこれまで通り取り掛かってくれ！」

大淀

「特に大淀ドロップ作戦は優先でお願いします！」

信長

「お前も粘るな。」

続く。

## 提督会議開催

三月。上層部からの呼び出しで、信長は秘書艦の吹雪を連れて海軍防衛省に来ていた。彼等を含め、本土の各鎮守府の提督と秘書艦の艦娘達が招集されていた。

キヨウヤ

「やれやれ、これはどういうことかな織田中将。今回のイベントも含めて、佐世保基地は大規模作戦  
戦果無しかい?」

海軍運営上層部元帥『臥煙キヨウヤ』。齢14で元帥の座に登り着き、今や日本本土の海軍基地を束ねる人物だ。信長のことは良く思つておらず、毎回彼を呼び出しては仕事の鬱憤を晴らすため八つ当たりをしている。

信長

「この度は・・・。」

アルベド

「口を慎みなさい！織田中将！キヨウヤ様の前で謝罪など許しませんよ！」

そしてキヨウヤの秘書官を務めるアルベド（本名、田中真知子たなかまちこ）は忠誠心が厚く、キヨウヤの為ならば他の人材を容赦無く切り捨てるなど非常に冷徹な女なのだ。

ちなみにこの二人、フューチャーカードバディファイトの『臥煙キヨウヤ』でも無ければ、オーバーロードの『アルベド』でも無いぞ。

信長

「やれやれやつと終わったか。」

吹雪

「いいんですか司令官！」

信長

「構わん。言わせておけ。」

信長が席に着くと、彼の隣にいた将校が話し掛けってきた。

辰馬

「おまんも毎回元帥殿の小言聞かされて大変やな！のう陸奥、わしには耐えられんぜ  
よ。」

陸奥

「そりや提督が根性無しなだけじや。」

舞鶴鎮守府司令官『坂本辰馬』中将とその秘書艦の艦娘『陸奥』である。信長とは同期の仲で、良き相談相手でもある。

オルガ

「やめてくださいよ坂本さん。そもそも兄貴に喧嘩ふつかけて来る臥煙のクソガキが悪いんすよ。そうだろ？ミカ。」

三日月

「提督。そのノリで私に振るのやめて貰えませんか？」

呉鎮守府司令官『オルガ・イツカ』大佐とその秘書艦の艦娘『三日月』。信長の後輩であるオルガは彼のことを慕つている。

伊吹

「まあ、今回はその件ではないだろう。航空巡洋艦の改二と再来月に行われる大規模作戦イベント

だと思うが。」

神通

「では早速、鈴谷さんのレベル上げと、資源、資材の調達の為の遠征艦隊を編成します

ね。」

大湊鎮守府司令官『伊吹コウジ』大佐とその秘書艦の艦娘『神通』。オルガとは同期な  
のだが信長達とは接点がない為、本人は交友を深めようと努力している。

岬

「どうしよう!! またイベントが始まるよ!!」  
大規模作戦

浜風

「大丈夫です!! 今度こそ成功させましょう!!」

明乃

「無理だよ!! イベントは苦手なんだよ!!」  
大規模作戦

横須賀鎮守府司令官『岬明乃』とその秘書艦の艦娘『浜風』である。指揮官としては  
頼りないが、その戦略と戦術はどの鎮守府の提督よりも優れており、重要拠点である横

須賀鎮守府を任せられたのだ。

信長

「通常海域は制圧してゐるのに何故イベントだけは失敗ばかりなんだ？」  
大規模作戦

辰馬

「それが不思議ぜよ。」

ちなみに彼女の階級は元帥である。さらにこの提督達、『銀魂』の『坂本辰馬』でも『機動戦士ガンダム 鉄血のオルフエンズ』の『オルガ・イツカ』でも『カードファイトヴアンガードNEXT』の『伊吹コウジ』でも『ハイスクールフリーント』の『岬明乃』でもないぞ。

辰馬、オルガ、伊吹

「やめろ!!パクリだと誤解されるだろ!!」

明乃

「そ、うだよ！本人と間違われたら大変だよ！著作権違法だと思われちゃうから!!」

浜風

「司令官!!余計な事言わないで下さい!!」

時既に遅し。

キヨウヤ

「では今月の予定を発表させて貰う。来月辺りにある最上型航空巡洋艦一隻の第二改造が可能になる。誰とは言わないうが、各鎮守府の提督は準備をするように。」

全員が睨んだ通り、やはり最上型航空巡洋艦鈴谷の改二についての連絡だった。

明乃

「あつ、  
鈴谷育てなかつた。」

浜風

「直ぐに鈴谷さんを演習に出すよう連絡します!!」

一人を除いては。

キヨウヤ

「さて。それでは本題に入らせて貰うよ。」

この時、信長達は不審感を抱いていた。既に本題の話は終わつた筈なのだが、彼からまだ重大な発表があるようだ。

キヨウヤ

「各鎮守府から『艦娘に対するセクハラ』の苦情が来ているんだが、君達全員、この場で取調べを受けてもらうよ?」

信長

「そつちが本題かあ!?」

何故か鎮守府でのセクハラ事情についてだつた。

アルベド

「織田中将。あなた阿賀野型軽巡洋艦『矢矧』の着任時、胸を驚掴みにしたとか?」

辰馬

「なんじやノブ! おま艦娘に痴漢なんかしたんかあ!?」

信長

「死にかけたがな。だが後悔はしていない!!」

辰馬

「この帝国海軍の恥さらしがあ!!」

アルベド

「ちなみに坂本中将は『痴漢』『盗撮』『覗き』などの報告が上がつて来ています。」

辰馬

「あのすいません。なんで家の秘密情報をお宅らが知ってるんですか?」

信長

「貴様が恥さらしだこの犯罪者!!」

辰馬

「何を言うかノブ!『そこに女の胸とケツがある限り、男はそれに向かつて真っ直ぐ進む』だけじゃ!」

陸奥

「姉貴と一緒にしばくぞ。アホ。」

信長だけで無く各鎮守府でもセクハラをした提督達がいた。

アルベド

「次にイツカ大佐は、艦娘の入渠中に堂々と裸で入り、混浴気分を味わおうとしていたとか？」

オルガ

「俺達『鉄華団』は居場所を求めて進み続けて来た。だが辿り着いた場所で突如『ギヤラルホルン』に待ち伏せされ、俺達は滅びを受け容れるしかなかつた。」

三日月

「今<sup>の</sup>を翻訳しますと、オルガ<sup>提督</sup><sub>が突然</sub>ドッグに入つて、そこを入渠中だつた大和さんと武藏さんに見つかつて、<sup>4</sup>ダンスレイブ<sup>6cm砲</sup>で撃たれたそうです。ちなみに提督は「俺は止まらねーから！だから・・・お前らも止まるな！」とかわけのわからないこと言つて人差し指立てたまま倒れたそうです。」

アルベド

「なに下らない出来事壮大に語つてるのよ!!」

まさにガンダムである。

アルベド

「次に伊吹大佐は、航空母艦『翔鶴』に用があると行つて彼女の着替え中に部屋に入ったとか?」

伊吹

「イメージしろ。紐パン一枚となつた翔鶴の姿を。」

アルベド

「最低だなお前。」

神通

「すいません提督。鼻血が止まりません。」

アルベド

「秘書艦もか!?」

その時だつた。

明乃

「いい加減にして下さい!!」

横須賀鎮守府の岬明乃元帥が怒り始めたのだ。

信長

「どうした? 岬元帥。」

明乃

「皆さん艦娘をなんだと思つてるんですか!! みんな命懸けで深海淵艦と闘つてるんですよ!! あなたの方の欲情発散の道具じやないんです!!」

浜風

「司令官!!」

明乃

「何！浜ちゃん!!」

浜風  
大規模作戦

明乃

「それ今言うの!?」

信長、辰馬、オルガ、伊吹

「作戦失敗してるのそれが原因かあ!?」

本末転倒である。

アルベド

「横須賀鎮守府秘書艦『浜風』。詳しい内容を説明して下さい。」

浜風

「はい！提督は艦娘の出撃前に「根性注入！」と言ひながらお尻を触るのを横須賀鎮守府伝統にしようと、出撃の度にお尻を触るのが日課に！」

信長

「毎日か？」

明乃

「だつて！横須賀鎮守府に何か思い出残しかつたもん！」

辰馬

「いけませんな岬元帥。艦娘は貴方の欲情発散の道具ではあらへんよ。」

明乃

「そんなことないよ！『海の仲間は家族だから』。」

信長

「ハイスクールフリーの感動的な決め台詞を汚すなあ!!」

横須賀鎮守府も十分酷かつた。

信長

「ところで臥煙元帥。貴殿はその情報を何処で入手した?何処の鎮守府も内密にしていたはずだが?」

信長は情報源が何処か気になっていた。だが臥煙元帥から衝撃の答えが返つて來た。

キヨウヤ

「は?何言つてるの?君の所の大淀さんが、他の鎮守府の大淀さんから情報を集めてまとめてレポートにして提出してくれたんだよ?」

信長

「あいつ本氣でチクリやがったな!!」

前回の話しの後、大淀は海軍防衛省に報告していた。

信長

「全く！ろくな情報しか得られなかつたわ！」

吹雪

「これに懲りたら、もうセクハラなんてやめて下さいね！」

信長

「肝に命じておく。早速帰つて、鈴谷の改造準備に入るぞ。」

吹雪

「了解です！」

こうして佐世保鎮守府に戻つた信長達だつた。そして四月に入り、鈴谷の改二が実装された。

鈴谷

「嬉しいけどさ・・・Level85で改装設計図有りってどうするのよ!!鈴谷まだLevel167だよ!!」

信長

「すまん二ヶ月くらい先になる。」

佐世保の鈴谷の改造はまだ先になりそうだ。

辰馬

「家は無事に改造出来ました!」

伊吹

「抜かりはない。」

明乃

「ギリギリ改造出来ました!」

オルガ

「おいミカ。なんで家は改造出来ないんだ?」

三日月

「だつて鈴谷さんまだLevel16じゃないですか？それ以前に家の艦隊の平均Level30未満じやないですか！私ですらLevel27ですよ!!」

信長

「よくそれで大規模作戦成功させたな？」

続く

# 食戟の比叡

春の季節となつた四月は、新たな学校で生活する学生や新入社員として働く社会人もいる。だが、この季節はそれだけではない。

信長

「戦艦『長門』。貴官のLevelは99に達し、『ケツコンカツコカリ』は成立した。今日からワシと貴様は夫婦になる。よろしく頼むぞ。」

長門

「ああ・・・任せておけ。ながもんメッチャ頑張るから!!」

信長

「あまりの嬉しさに長門が那珂になつとる!?」

新たな門出を祝う季節でもある。

蒼龍

「やつと家の鎮守府にも春が来たね。」

那智

「そうだな。佐世保鎮守府を立ち上げて二年、ようやく鎮守府らしくなつて來た。問題は……。」

吹雪

「司令官のバカ！ヒゲ！<sup>ゴリラ</sup>長門に潰されて死んじやえ!!」

那智

「秘書艦がしばらく再起不能になる事だ。」

蒼龍

「ちよつと吹雪!? 何処へ行くの!?」

そして・・・。

イヨク

「とうとうドイツの戦艦の建造が成功した！一刻も早く信長様に報告せねば!!」

バタンツ！グシャツ!!

蒼龍

「提督！吹雪が勢いよくドアを開けたせいで、イヨク大佐がドアと壁に挟まつてぺしやんここ!!」

那智

「そうではないぞ蒼龍!!ここはガンダムグシオンリベイクフルシティの大型シザーズで  
ぺしやんこにすべきではなかつたのではないか!?でなければこいつのキャラが薄くな  
るぞ!!」

イヨク

「鉄血のオルフェンズネタでキャラにしないで下さい!!」

信長

「喧しい。それよりどうしたイヨク。」

イヨク

「はっ！信長様も待ちかねた戦艦『ビスマルク』の建造が完了しました！」

信長

「そうか！ついに来たか!!」

蒼龍

「ところで大佐？さつきドアに潰されましたよね？壁一面に血が飛び散つてましたけど大丈夫ですか？」

イヨク

「ギャグ補正が付いていたので大丈夫です！」

信長

「なら後で掃除しとけ！」

出会いの季節もある。

ビスマルク

「Gute Tag. 私はビスマルク型戦艦のネームシップ、ビスマルク。よおく覚えておくのよ！」

信長

「ワシがこの基地の司令官の織田信長だ。貴様の働きに期待しているぞ！」

ビスマルク

「任せなさい。この私、ビスマルクが艦隊と アドミラル admiral に勝利を捧げて見せるわ！」

信長

「大した自信だ。だが貴様はまだ出撃せん。しばらくは演習に出てもらう。」

ビスマルク

「わかったわ！」

信長

「このウォースパイトがお前の教育係を務める。わからないことがあれば、彼女に聞く  
よう。」

ビスマルク

「お断りよ。」

信長

「なに?」

ビスマルク

「忘れたの? 彼女はイギリスの軍艦よ! 敵だつた相手と馴れ合うつもりはないわ! ましてや彼女に従うなんて真っ平ごめんよ。」

信長

(こんな古い考え方してる奴いたんだな。)

ウォースパイト

「それは困りました。ではこうしましよう。演習で私にWINしたら貴方の好きにしていいわ。」

ビスマルク

「じゃあ貴方が勝つたら？」

ウォースパイト

「私の言うことを聞いてもらいます。OKビスマルク？」

ビスマルク

「いいわよ！貴方を一撃で大破させて「give up」と言わせやるわ！」

レーベ、マックス

（自分で死亡フラグ立てた。）

だがそれは人によつて様々な出会いがある。

ビスマルク

「E s   w u r d e   g e s c h l a g e n. (負けました)。」

レーベ、マックス

「だから言わんこつちやない。」

ビスマルク

「うるさいわね!!」

このビスマルクもそうだ。

ウォースパイト

「ビスマルク。貴方は練度は低いですが、才能はあります。Levelを上げていけば、

誰にも負けない *battle ship* になるでしょう。」

ビスマルク

「ウォースパイント……あなた。」

ウォースパイト

「*admiral* は貴方の改造と近代化改修を終えてから出撃させると言つて いまし  
た。私も貴方が立派に戦えるよう *lecture* します。覚悟はいいですね? ビスマ  
ルク。」

レーベ

「ちなみにウォースパイトは皆んなから先生って呼ばれてるんだ。」

ビスマルク

「そう。ならお願ひするわ! 先生。」

最初の出会いで人の人生は大きく変わる。

「私ザラ級重巡ザラ！よろしくね！」

ビスマルク

「よろしく。ここにはイタリア艦もいるのね。」

コマンドテスト

「コマンド・テスト。ニホンゴジョウズデハアリマセン。ヨロシクオネガイシマス。」

ビスマルク

「気にしなくていいわ。少しずつ覚えていけばいいんだから。」

コマンドテスト

「デモ、オチコンデルヒト、ナグサメルコトバナラシツテマス。」

ビスマルク

「何かしら?」

コマンドテスト

「元気<sup>ゲンキ</sup>、ダシテクダサイ。」

ビスマルク

「悪いけど、それ落ち込んでる人に止めを刺す言葉だから。」

そんな季節なのだ。

大淀

「提督。春の季節が全く感じられません。」

信長

「まあビスマルクとウォースパイントが打ち解けられただけでもよかつたではないか。」

大淀

「良かねーよ。前回の話もそうですけど提督の文章が下手過ぎて何言つてるのかちんぷんかんぷんなんですよ！」

信長

「そうなのか？」

大淀

「自覚無いんかいツ!?」

だが信長にとつて四月はそれだけではない。

信長

(明日でワシも28か。また一つ歳をとるのだな。)

彼の死のカウントダウンを告げる時期でもあるのだ。

信長

「ワシまだ若いのに!?」

その翌日。

信長

(さて今日も任務を済ませるか。)

彼が提督室に入ると、そこには大淀と明石の姿があつた。

大淀

「提督。お待ちしてました。」

信長

「大淀に明石？お前達ここで何をしている。」

明石

「何つて提督待つてたんですよ。はい、これ。」

明石から渡されたのは、ケツコンカツコカリに必要な書類一式と指輪だつた。

信長

「これどうした？」

大淀

「DMMのポイントが余つてたので、それ使つて買いましたが？」

信長

「またお前は勝手な事を！」

明石

「いいから！それ持つて食堂に行きますよ！」

信長

「何を言う！今日の仕事が終わってないではないか！」

大淀

「それなら提督が着任する前に全て終わらせましたか？」

信長

「は？」

明石

「開発、建造、解体、近代化改修。工廠に関する任務は終わらせました。近代化改修は改  
造したばかりの『能代』さんに回しました。」

信長

「出撃と演習もか？」

大淀

「演習はビスマルクさんのLevelが上がったぐらいで終わりましたが、出撃の方は失敗しました。」

信長

「ん？ 確か阿武隈達は輸送作戦だつたはずだが、誰か大破者でも出たのか？」

大淀

「いいえ。輸送作戦は成功しました。失敗したのは大淀ドロップ作戦です。」

信長

「なんだそつちか。」

大淀

「あの二人・・・軽巡しか出てこないとか言い訳ばかり!!」

信長

「阿武隈も鬼怒も大変だな。」

大淀

「提督。あのポンコツ二人解体してもいいですか？」

信長

「やめんか馬鹿者。」

明石

「まあまあ！もう食堂に行きますよ！皆さんお待ちかねです!!」

信長は明石と大淀に連れていかれ、食堂に向かつた。入るとそこには艦娘達やイヨク、光秀が集まっていた。

信長

「これは・・・。」

信長はぶら下がつてた垂れ幕を見た。そこには『提督！お誕生日おめでとう！』と書かれていた。彼女達は、提督の誕生日を祝おうと準備をして待っていたのだ。

天龍

「おっせーぞ提督！」

榛名

「提督！おめでとうござります！」

龍田

「おめでとう。等々お爺ちゃんの歳まで来ちゃいましたね？」

信長

「ワシまだ若いんだけど？」

翔鶴

「提督おめでとうござります。また寿命が一つ減りましたね。」

信長

「なんで揃いも揃つてお爺ちゃん扱い？」

妙高

「提督。どうぞこちらへ。」

今度は妙高に案内され、艦娘達が見渡せる特別席に座った。

利根

「さて！神通達はまだ遠征から帰つて来ておらぬが、先に提督にプレゼントを渡してしまおうぞ！」

すると奥の部屋から声が聞こえて来た。

吹雪

「やつぱり恥ずかしいですよ。」

山城

「プレゼントが何恥ずかしがつてるのよ！」

由良

「ほら吹雪ちゃん。提督さんが待つてるよ。」

蒼龍

「さつさと行つた行つた！」

部屋から吹雪が出て來たが、彼女の格好に信長は驚いていた。

信長

「吹雪。その格好は。」

なんと彼女はウエディングドレスを着ていた。しかもただのウエディングドレスではない。アニメ艦隊これくしょんの吹雪が着ていたドレスと同じ物を着ていたのだ。

吹雪

「司令官。特型駆逐艦『吹雪』はLevel99になりました。準備はいいです！」

信長

「そうか。思い返せば、ワシが提督になる以前にお前とは訓練学校に出会い、そしてワシの初期艦として尽くしてくれた。ドジで空回りするお前を見て、最初は頼りないと思つていたが誰よりも頑張り屋で明るかつた。いつしかアニメ艦隊これくしょんの吹雪よりも頼り甲斐がある存在になつた。」

赤城

「そうですね？ アニメ艦隊これくしょんのポスターを見て、私と加賀さんと吹雪さんを原作の田舎の芋娘とアニメの都会つ娘美人の差で認識していましたからね。」

加賀

「あれは流石に頭にきました。」

信長

「悪かったから話戻してもいいか？」

この話はまた今度で紹介しよう。

信長

「特型駆逐艦『吹雪』。貴官のLevelは99に達し、ケツコンカツコカリは成立した。貴様とワシは今日から夫婦めおとになる。これからも秘書艦としてよろしく頼むぞ。」

吹雪

「はい！ 私司令官の事大スツ・・・信頼しています！」

隼鷹

「せめて『私と一発夜戦しませんか!!』ぐらい言え!!」

信長

「そこの酔っ払い黙つとけ!!」

信長にとつて、この日は最高の誕生日となつた。

長門

「あれ?おかしいな?私の時より盛大に祝つてない?ケツコンカツコカリ?」

陸奥

「そりやそうでしょ?提督の誕生日なんだから。」

そんな光景を見て涙目を浮かべている艦娘もいた。

信長

「ん？ところで料理が出ていないが？」

さつきから気になっていたが、誕生日パーティなのにケーキどころか料理も出ていないのだ。

比叡

「心配ありません提督！この比叡が気合い！入れて！作ります!!」

信長

「誰だ!? 比叡に料理を任せたのは!!」

信長が予定より早く鎮守府に着任したため、まだ準備が出来ていないのだ。そこで金剛型戦艦『比叡』が代理で作る事になったのだ。

信長

「だから何故比叡なんだ!?」

那智

「どうしても自分で作ると聞かなくてな。まあ今回は大目に見てやれ。」

信長

「いや・・・ワシの誕生日なんだけど?」

那智

「安心しろ! ちゃんとした料理は鳳翔と大和と間宮が作ってくれている!!」

信長

「そつちを出せ。」

全くである。だがそんな状況を打開しようと立ち上がった者がいた。

ウォースパイト

「待つてください比叡さん!!」

ウォースパイトが比叡に挑戦を挑んだ。

ウォースパイト

「貴方にキッチンを渡す訳にはいきません! 私と料理勝負して下さい!!」

比叡

「まさか、あの佐世保鎮守府伝統の『食戟』で挑むつもりですか!?」

ウォースパイト

「YES! 提督を死なせる訳にはいきません!!」

比叡

「いいでしょう!~この食戟受けて立ちましょう!!」

信長

「その前に食戟などと言うイベント家にはないぞ。」

その筈だったが、食戟と聞いてある艦娘が立ち上がった。

赤城

「双方の同意により、食戟は成立しました。この『佐世保鎮守府食戟委員会委員長』一航戦赤城が務めさせていただきます。」

信長

「そんな委員会ワシ許可した覚えないぞ。」

だが一度決まつてしまつた勝負は誰にも止められない。比叡とウォースパイトの戦いが幕を開けた。

信長

「勝手に始めよって。」

お題は金曜日と言う事でカレーに、その審査員は、信長、吹雪、長門である。

蒼龍

「まあ、適当にウォースパイトのだけ食べて、勝ちつてこといいですね？」

足柄

「そうよね！それにイギリスは食文化はマシになつて來てるから大丈夫よ！」

信長

「甘いな二人とも。この食戟、ワシはウォースパイトの料理も食べるつもりもない。」

「なんで？」

蒼龍

信長

「確かに足柄の言う通り、今のイギリス食文化は発展を遂げているが、ウォースパイトはお前達と同じ一世紀前の軍艦だ。戦時中じや食文化もあつたもんじやない。」

蒼龍

「つまり？」

信長

「どちらにしても不味い飯しか食わされない。」

足柄

「何よこの食戟。料理<sup>ヒツ</sup><sub>ハウ</sub>が下手な人と味音痴<sup>ハシ</sup><sub>オース</sub>な人の無駄な戦いじやない。」

信長

「そこである作戦を発令する。」

足柄

「作戦？」

信長

「題して！『叡山先輩！食戟乗つ取つちゃつたよ!!』作戦!!」

蒼龍、足柄

「なんて最低な作戦!!」

吹雪、長門

「流石私の夫。」

足柄

「あんたらこんな最低な提督が夫で艦娘として恥ずかしくないの!?」

吹雪

「え？何言つてるんですか足柄さん？」

長門

「比叡のカレーを食べるなんて自殺志願者みたいなものだぞ？」

足柄

「せめてウォースパイントのだけでも食べてあげなさいよ。」

しばらくして比叡のカレーが完成した。

比叡

「さあ司令！…どうぞ召し上がつて下さい!!」

だが信長は何も答えず黙つたままだつた。

比叡

「司令？」

信長

「ホワイトボードを見てみろ。」

言われた通りにホワイトボードを見てみると、ウォースパイト側に既に3の文字が刻まれていた。得点を担当していたのは浜風と浦風である。

比叡

「ちよつと！ 貴方達何してんの!! まだ試食すらしてないでしようが!!」

浜風

「すいません比叡！」

浦風

「提督の命令なんや！ 堪忍したつて！」

比叡

「はい？ ど言う事ですか？」

ウォースパイト

「フフフ・・・まだお気づきになりませんか？比叡さん。」

比叡

「ウォースパイト！貴方の仕業ですか!?」

ウォースパイト

「残念ですが貴方が勝負を挑んだ時点で、私のW.I.Nは決まつていました。」

比叡

「赤城さん!!」

赤城

「まさか食戟が乗つ取られるなんて。」

信長の言つていた『叡山先輩！食戟乗つ取つちやつたよ！』作戦はその名の通り、比

「比叡と赤城以外の艦娘達をウォースパイント側に着かせ、勝手にウォースパイントに勝利させる作戦なのである。」

金剛

「ダーリンの作戦以前にみんな比叡のカレーを食べたくないからウォースパイントに協力してるだけネ。」

霧島

「比叡お姉様のカレーはポイズンクッキング並みに殺人級ですからね。」

榛名

「ごめんなさい比叡お姉様。榛名は薄情者です!!」

「姉妹ですから警戒するくらい比叡の料理は不味いのである。」

信長

「そう言う事だ比叡！このような茶番劇は終わりだ！さっさと片付けよ！」

比叡

「ヒエ～!! そんなこと言わずに!!」

信長

「うるさい!! 食戟終了！ お疲れ様!! 片付け開始!!」

信長の一言で、比叡の中の変なスイッチが入った。

比叡

「あれ？ 司令逃げるんですか？ 私の料理に！」

信長

「何？」

信長も比叡に挑発され、彼の中の変なスイッチが入った。

比叡

「ウォースパイントの勝ちなら別にいいじゃないですか？私の料理を食べても問題はありませんよね？」

信長

「比叡。貴様上官に対する無礼極まり無い行為がどういう事かわかつているのか。」

比叡

「そんなの司令がこのカレーを食べれば一発で吹っ飛びますよ。さあ・・・おあがりよ！」

信長

「よかろう。貴様がそこまで言うのであれば、その実力見せて貰おうかあ!!」

光秀、イヨク

「ストおおおおプツ!!」

信長がカレーを食べる直前に、光秀とイヨクが止めに入った。

光秀

「司令早まらないで下さい!!」

イヨク

「比叡殿の挑発に乗らないで下さい!!」

信長

「離せ二人とも!・ワシの胃袋は比叡のカレー程度で壊れぬわあ!!」

光秀

「いや胃袋は強いかもしませんけど腸はメチャクチャ弱いでしょ!?」

イヨク

「昨日の朝牛乳一口飲んだだけでトイレに一時間も籠城してませんでしたつけ!?」

信長

「言うな恥ずかしい!!」

その時、信長はうつかりスプーンに掬くつてあつた比叡カレーを思わず口の中にいれてしまつた。彼の脳裏に一瞬いろんなものが浮かんできた。

信長

「(これは、キムチと納豆とバニラが入り混ざり、さらにその三つの味を引き立たせるためにくさやをいれているのか!?絶妙なマッチングにすぐく不味い!!具はフオアグラにイチゴにパイナップル、さらにいくらに混じつてキャビアだと!?犬の糞みたいな匂いがするぞ!!いかん!さつきの一口で下が麻痺してきた!?しかも頭痛、吐き気、目眩が一気に押し寄せて來た!?その後に腹痛までもか!!さらに蕁麻疹(じんましん)だと!?だんだんと全身の力が抜けて來た。意識が・・・薄れていく。比叡の料理を侮つていた。これは料理ではない。立派な毒物兵器だ。)グハア!!」

「お粗末!!」  
比叡

その直後、神通、川内、那珂、浦波、水無月、江風が遠征から帰還した。

神通

「遅くなりました!! 第二艦隊ただいま遠征から帰投し・・・提督!?」

川内

「なんの殺人現場よこれ!?」

信長は血反吐を出したまま倒れ、痙攣していた。

比叡

「ヒエー!! 司令しつかりして下さい!! 誰ですか! 私の料理に毒物なんて仕込んだのは  
!?

山城

「お前だよ。ポイズンクッキング野郎!!」

本人自覚なし。

那珂

「提督！ 那珂ちゃんお手製プリン食べて!!」

川内

「ちよつと那珂！ そんなの食べて提督が元気なるわけ・・・。」

信長

「アマ～!!」

川内

「復活したあ!?」

その時、厨房から間宮、大和、鳳翔が料理を持って食堂に入ってきた。そこからは平

和的に誕生会が行われた。

信長

「さて。」

誕生会も終わりに近づいたところで、信長から最後の挨拶と連絡が発表された。

信長

「皆（アリ）苦労。このような会を開いていただき誠に感謝する。翔鶴や龍田の言う通り、ワシも一つ歳をとった。だがまだ若い！来月の大規模作戦<sup>（イイペント）</sup>はワシも本気を出して攻略しよう！！」

それを聞いた時、艦娘達が全員落胆した。

信長

「どうかしたか？」

大淀

「いやだつてこの時期だけ家の鎮守府ブラック企業化するじゃないですか？」

信長

「いや今までが働くかなさすぎなのでは？」

そう、五月はみんなが待っていたイベント海域開放の季節である。

信長

「今回の作戦名は『出撃！北東方面 第五艦隊!!』だ！」

吹雪

「北東方面？」

信長

「津軽海峡から北方領土付近の海域が戦場になる。」

大淀

「津軽海峡つて確か・・・。」

信長

「そうだ。伊吹提督がいる大湊鎮守府だ。」

続く

# 出撃！北東方面 第五艦隊!!ヒミツの鎮守府！

五月。『出撃！北東方面 第五艦隊!!』が発令された。

信長は前段作戦の『出撃！大湊警備府』には第四駆逐隊（暁、ペールヌイ、雷、電）と五十鈴、山城の艦隊に津軽海峡／北海道沖に出撃した。

がそこに一本の電話がかかってきた。相手は大湊鎮守府提督の伊吹大佐だつた。

信長

「はい佐世保鎮守府！なんだ伊吹か。何の用だ？」

伊吹

『いやそれこっちのセリフなんですけど？なんかお宅の艦娘が家に殴り込みに来てるんですけど？』

信長

「そうか着いたか？」

伊吹

『いや今迷惑してるんで帰らせてもらえますか？』

信長

「伊吹。何故ワシがそつちに艦隊を送ったかわかるか？」

伊吹

『いいえ。』

信長

「お前がイベント中の他所の鎮守府の艦隊を妨害しているからだ！」

大規模作戦

何故、信長が作戦中に大湊に襲撃をしたのかというと、各鎮守府から大湊からの作戦妨害を受けたとの報告があり、邪魔立てする大湊を根本から黙らせようと動いていたのだ。

伊吹

『何だ貴様は!?家の山城ではないな!?』

山城

『お前の!そのアホな幻想を!この右手でブチ殺す!!』

伊吹

『アベシツ!!』

山城

『提督。大湊鎮守府制圧完了。』

信長

「うむ、ご苦労だった。大湊鎮守府で補給と整備後、津軽海峡並びに北海道沖に向かって  
くれと曉に伝えてくれ。」

山城

『了解！』

信長

「大淀。本部に連絡だ。」

大淀

「これでやっと大淀ドロップ作戦に集中できますね。」

信長

「それは後!!」

こうして大湊警部府を一日で攻略。その翌日の同じ津軽海峡／北海道沖で輸送作戦

と殲滅作戦を攻略後、さらにその翌日に、千島列島で輸送作戦と殲滅作戦を攻略し、前段作戦を完遂した。

金剛

「なんか田舎の芋大福みたいな深海棲艦が妖怪みたいな艦載機出してきたネ。」

信長

「なんだそれ?」

千島列島のラスボス護衛棲姫である。さらにその翌日、占守島沖を攻略した。

摩耶

「離島凄姫と初めて戦ったけど・・・ゴスロリの癖に弱かつたな!」

那珂

「摩耶ちゃん! ゴスロリ甘く見ちゃダメだよ!!」

摩耶

「は？ゴスロリだろ？あんな動きづらそうな格好して戦えねーだろ？」

那珂

「わかってないなあ、摩耶ちゃんは。最近のゴスロリは、格好維持しつつ動きやすくなってるんだよ!!」

摩耶

「本当か？」

那珂

「本当だよ!! スターライト学園にゴスロリを着たバンパイアだつているし、氷の女王だつているんだから!!」

摩耶

「おい、スターライト学園つてアイドル学校だよな？なんだその化け物みたいな二つ名ついたアイドルは!?」

那珂

「おまけに四ツ星学園には『ツンドラの歌姫』だつているんだから!!」

摩耶

「アイドルつてそんなバトル漫画みたいに強そうな奴がゴロゴロいるのか!?」

信長

「そんなわけないだろ。」

だが信長達の余裕もここまでであつた。次の大ホッケ北方で、問題が発生した。

摩耶、金剛、比叡、ウオースバイト、隼鷹、飛鷹、阿武隈、榛名、北上、大井、朝潮、  
夕立

「痴女が出たあああああ!!」

信長

「なんだいきなり!?」

大ホツケ北方に出撃していた機動部隊が帰還した時だつた。北方水鬼の格好に問題があつたらしい。

信長

「一体何があつた?」

摩耶

「だから痴女!! 北方水鬼がコート一枚羽織つて全裸だつたんだよ!!」

信長

「何を言つてるんだお前は!?」

北上

「提督、一つ言つていい? おっぱい隠してなかつたよ。」

信長

「何をバカな事を言つている。確かに露出の激しい深海棲艦はいたが流石に全裸はないだろ。」

大井

「ちよつと!北上さんの言うこと信じないの!?」

信長

「信じられん。急用を思い出した。後の事は任せる。」

大淀

「提督?どちらへ?」

信長

「大湊鎮守府だ。伊吹大佐の様子を見てくる。留守中は光秀かイヨクに任せる。」

光秀、イヨク

「すいません。私達も外出するのですが？」

信長

「はあ!?」

静かに提督室に入ってきたイヨクと光秀だつた。

信長

「貴様ら一体何処へ出かけるつもりだ?」

光秀

「伊吹大佐のところです!大湊鎮守府を拠点に大ホツケ北方に偵察に行つてきます!!」

信長

「おい。まさか北方水鬼を見に行くわけではあるまいな?」

イヨク

「ななななな何をバカな事を!?」

光秀

「何故我々がそのような破廉恥な事をすると思つてているのですか!?」

信長

「決まつていてる!・ワシがお前達の立場ならそうしたからだ!」

大淀

「つまりお前ら三人とも今から全裸の北方水鬼を見に行くと?」

大淀の発言に信長達は一斉に走り出した。三人共目的は同じだったようだ。

大淀

「主力連合艦隊!・あの変態バカ共追ええええ!!」

摩耶、金剛、比叡、ウォースバイト、隼鷹、飛鷹、阿武隈、榛名、北上、大井、朝潮、

夕立

「待てこの変態共!!」

信長がドアを開けた時、山城が目の前に立っていた。

山城

「お前らのその破廉恥な幻想を、私の試製41cm砲でブチ殺す!!」

信長、光秀、イヨク

「はわあ!?」

こうして、大ホツケ北方は攻略し、北の魔女作戦は成功、後段作戦を全て終え、一週間に渡る大規模作戦イベントは幕を閉じた。

大淀

「提督。新しい艦娘が着任しました。」

信長  
「通せ。」

翌日、佐世保鎮守府に新たな艦娘が着任した。

長波

「夕雲型駆逐艦4番艦、長波サマだよ！さーいくぜ、オーッ！」

朝風

「おはよう！ 朝風よ。神風型駆逐艦二番艦、朝風。司令官？ 早く覚えなさい！」

い？」

神威

「給油艦、神威と申します。はい、北海道神威岬の名前を頂いてます。できる限り、頑張りますね。」

春日丸

「特設航空母艦、春日丸と申します。  
不束者ですが、務めを果したいと思います。」

藤波

「お疲れ！ 夕雲型十一番艦、藤波よ。司令、よろしくね！」

占守

「占守型海防艦1番艦、占守つす！ 司令、沿岸防衛はこの占守に任せらるつす。海を守  
る、海防艦つす。うん！・しむしゅしゅしゅつゝ♪」

国後

「占守型海防艦、その二番艦、国後。何それ？ 違うけど？ そうね、クナつて：呼んで  
もらつてもいいけど。後家の姉がふざけた自己紹介してすいませんでした!!」

占守

「はわッ!?」

択捉

「司令、おはようございます！ 択捉型海防艦一番艦、択捉です。今日も頑張ります！」

ガングート

「貴様が提督というヤツか？ ふん。私が<sup>タ雲型</sup>Га<sup>Н</sup>Гу<sup>т</sup><sub>六番艦</sub>の、<sup>逐艦</sup>Га<sup>Н</sup>Гу<sup>т</sup>級<sup>一</sup>番艦<sup>の</sup>、<sup>ホントかもです。</sup>Га<sup>Н</sup>Гу<sup>т</sup>です。<sup>あ、あの三頑張ります！</sup>いい面構えだ。いいだろう。」

光秀

「あの・・・なんかおかしくありませんか？」

ガングート

「おい高波。私の後ろに隠れてないで出てこい！」

高波

「だつて恥ずかしいですよ。」

ガングート

「なら何故私の自己紹介中に名乗り出た!?」

リツトリオ

「お見苦しいところを見せてしまってすいません。ヴィットリオ・ヴェネト級戦艦2番艦、リツトリオです。火力と速度には自信があるの。よろしくお願ひしますね。」

ローマ

「ヴィットリオ・ヴェネト級戦艦4番艦、ローマです。よろしく。何?あまりジロジロ

見ないでくださいねつてあんたもかあ!」

ヒトミ

「恥ずかしい・・・。」

信長

（後半あたりグダクダだつたな。）

新たに、補給艦、海防艦に加え、ロシア、イタリアの戦艦が入つてきた。信長はまず、

ガングートと春日丸の育成に入った。

信長

「お前達二人にはしばらく演習に出てもらう。」

ガングート

「何!?出撃ではないのか!?」

信長

「まだ出撃は早い。先ずは練度を上げてからだ。」

ガングート

「わかった。」

信長

「このビスマルクがお前達の教育係となる。わからない事があれば彼女に聞け。」

ガングート

「断る。」

信長

「なに？」

ガングート

「敵国であるドイツの指導など真平ごめんだ!!」

信長

(おーいなんかこの展開先月もあつたような?)

ビスマルク

「いいわ! 私と演習で勝負してあなたが勝つたら好きにしていいわ。」

ガングート

「では貴様が勝つたら?」

ビスマルク

「私の訓練指導に従つてもらう。」

ガングート

「なら断る。」

ビスマルク

「ちよつとあんたいい加減にしなさいよ。解体するわよ!」

ガングート

「いやだつてドイツの訓練つて厳しいし、めんどくさいし、戦車道で家に負けてるし、話にならん!!」

ビスマルク

「ちよつと待ちなさい!!戦車道で敗戦したのは西住みほのせいでしょう!!それをハイエナのようになんあなた達が勝ち取ったんでしようが!!」

ガングート

「西住みほは仲間の救出に向かつただけだろ!!それに対応出来なかつた貴様等が悪いのではなか!?」

ビスマルク

「何ですつて!? 表出なさい! 貴方を完膚なきまでに大破してあげるわ!!」

ガングート

「いいだろ! 貴様を戦闘不能にして『シベリア送り25ブルーブル』の刑にしてやる!!」

二人は言い合いながら提督室を出て行つた。

光秀

「何故彼女達はガルパンの事でケンカしてたのでしょうか?」

信長

「ワシにもサッパリわからん。」

春日丸

「あの提督、私はどうしたらよろしいでしようか?」

信長

「すまん。あの二人のケンカが終わるまで様子を見る。しばらくは待機してくれ。」

その後、ガングートはビスマルクに挑戦するも45戦全敗という形で終わり、春日丸も演習に参加した。

信長

「惨敗か。」

そしてイベント終了後、もう一つ別の行事が残されていた。それはある小学校と女子

大規模作戦

高の校外学習による佐世保鎮守府の見学である。

大淀

「提督。明日の基地見学に訪れる二校ですが、予定通りにこちらに訪れるそうです。」

提督

「確かに女子校と小学校だったか？何事も無く無事に終わればいいが。」

だが当日、基地内見学中に問題が起きた。それは龍驤からの報告だった。

信長

「何？生徒二名が基地内で迷子だと？」

龍驤

『ちつと目を離した隙にいなくなつてしまふたんや。』

信長

「両学校 一名ずつか?」

龍驤

『せや。各学校代表して一名ずつや。』

信長

「確かプログラムでは最後は艦娘の紹介だつたな。」

龍驤

『ちようど今がそれや。』

信長

「わかった。学校側にはプログラム通り、そのまま解散してくれ。各学校の先生方には、逸れた生徒は一晩こちらで預かると伝えてくれ。」

龍驤

『何考えとるんや提督?』

信長

「その迷子の生徒等にワシ自ら特別講習を開いてやろうと思つてな。」

龍驤

『何や心配やな。提督の説教つて厳しすぎるところあるからな。子供泣かすなよ。』

信長

「安心しろ加減する。」

ちなみに今、佐世保鎮守府で迷子になつてゐる女子高生と小学生の正体はこの二人である。

あお

「いや～お互い苦労するよね。」

こころ

「本当ですよね。」

『フレームアームズガール』の主人公『源内あお』と『かみさまみならいヒミツのこころま』主人公『四葉こころ』である。どうやら彼女達のパートナーである『ここたま』と『フレームアームズガール』と逸れてしまい、基地内を探していたら迷子になつたという。

あお

「てかここ何処?」

こころ

「さあ? それにラキたま達と轟雷達はなんと工廠にいた。」

そのころ、ラキたま達と轟雷達はなんと工廠にいた。

「なるほど! つまりあなた方『ここたま』は、人に見られるとあるべき姿へ戻つてしまう

轟雷

のですね?」

お互い自己紹介中だった。

ラキたま

「そうだよーところで君たちは?」

轟雷

「私達は『フレームアームズガール』という小型のバトルロボット。そのテスト機です。ちなみに私は『轟雷』です。」

ラキたま

「僕いろいろひつかみさま『ラキたま』だよーよろしくね!」

ステイレット

「『ステイレット』よーよろしくね!」

メロリー

「ピアノのかみさま『メロリー』なの!」

キラリス

「リップのかみさま『キラリス』よ!」

バーゼラルド

「バーゼはね『バーゼラルド』って言うの!」

ゲラチョ

「おいらテレビのかみさま『ゲラチョ』だつチョ!」

モグタン

「フオーラのかみさま『モグタン』だグ!」

アーキテクト

「個体名『アーキテクト』。」

おシャキ

「ほんのかみさま『おシャキ』でござります！」

アーキテクト

「データ取得『本』。人類が脳内で構成した映像、又は視覚から入る情報を『文字』という言語に変換し、それを『紙』という物体に『文書』というプログラミングを作成し、データ化したデータディスクの事である。そのデータディスクに入力したプログラミングを別の人類の脳内に読み込ませる事により、映像を再構成することができる。」

おシャキ

「よくわかりませんが、私より物知りですね？」

アーキテクト

「なおこの小説を書いている作者は、その機能に障害があるため、データを作成しても、別の人類の脳内に読み込ませようとするとエラーが発生してしまう。」

ステイレット

「そんな障害持つてるんなら何故小説書こうと思った!?」

アーキテクト

「その障害は日常会話にも影響しており、酷い時は作者が就職活動中に振込詐欺の被害に会い、とりあえず交番の警察官に相談したところ、返答が『あなた障害者ですか?』と言われた。その返答に作者は『障害者ではありません。ただのバカです。』と再度返答した。」

ステイレット

「てかあんた何他人の個人情報まで取得して勝手にアップデートしてるのよ!やめなさい!!」

※アーキテクトの話した振込詐欺の相談事件は全て実話です。

クロ、シロ

「私達は双子のフレームアームズガール『マテリア』。」

シロ

「『シロ』と。」

クロ

「『クロ』よ。」

サリーヌ、パリーヌ

「リンクスインシャンプーの双子のかみさま！」

サリーヌ

「『サリーヌ』！」

パリーヌ

「『パリース』だよ!」

クロ

「えっとパリーグ君だっけ?」

パリース  
「パリースだよ。」

クロ

「貴方を見てるといじめたくなつてくるの。ねえ、いじめてもいい?」

パリース

「ダメだよ!! いじめは良くないよ!!」

クロ

「安心して、その内痛みも快感に変わつてくから、いじめられるのがますます好きになっていくわよ。」

パリーヌ

「イヤだよー!!」

クロ

「大丈夫。お姉さんがその身体にたっぷり刻み込んであ・げ・る。」

迅雷

「やめんかバカ者!!」

ドSがヒートアップした瞬間だつた。

迅雷

「拙者の名は『迅雷』と申す!お主の名は何という?」

ミシル

「アタシはポストのかみさま『ミシル』よ!みんなからは『女王様』って呼ばれてるんだ

から!」

迅雷

「なんと!一国の姫君でありましたか!?これは失礼した!!」

ミシル

「なんかよくわからないけど、もつとアタシを称えなさい!」

迅雷

「それで貴殿は何処の国姫君だ!甲斐か!奥州か!それとも尾張か!」

ミシル

「え?」

迅雷

「では今大河ドラマで絶賛放送中の『おんな城主 直虎』であるか!?」

ミシル

「よくわからないけどなんか格上げされてる!?」

明石

「迅雷さん? 多分ミシルちゃんは西洋の皇族のお姫様の事を言つてるじゃないでしょ  
うか?」

ミシル

「そう! それよ!」

夕張

「神様って言う割に子供なんだねー!」

轟雷

「あの? 貴方方は?」

明石

「これは失礼しました。私この工廠で整備を担当します、工作艦『明石』です！」

夕張

「兵装実験軽巡『夕張』よ！ よろしくね！」

轟雷、ステイレット、バーゼラルド、マテリア、迅雷、アーキテクト、ラキたま、メロリー、キラリス、おシャキ、ゲラチヨ、モグタン、サリース、パリース、ミシル「よろしくお願ひしますつて？うわあああああ！！！見つかったああああ！！！」

フレームアームズとここたま達は、工廠にいた明石と夕張に見つかった。二人はある艦娘の改造のため工廠で作業中だつたが、ラキたまと轟雷達の話し声が聞こえてしまつたみたいだ。ちなみに気づいたのが、アーキテクトがこの小説の作者の黒歴史を説明し始めた頃だつた。

明石

「てかこの小説書いてるの提督なんんですけどね？」

夕張

「提督若い頃振込詐欺にあつてたんだ。バカなの?」

そして、あおとこころも艦娘に見つかってしまつた。

ガングート

「なんだ貴様らは?」

しかもよりもよつてガングートと付き添いのヴェールヌイだつた。

ガングート

「ここで何をしている!!」

「こころ

「私達見学中に逸れた友達を探してたら迷子になちやつて!!」

あお  
「そうそう!!」

ガングート

「だが見学コースから大分外れているようだが?」

あおとこころがいた場所は、資料室や作戦室の近くだつたため、ガングートは二人を  
スペイだと疑つた。

ガングート

「間違えたでは済まされんぞ。二人共ここで銃殺刑にしてくれる。」

あお

「銃殺刑!?」

こころ

「本当に誤解なんです!! 許してください!!」

ガングート

「そうだな。ここでお前達を射殺しては私が提督に解体される。だが処罰は受けてもらう!!」

あお

「なんですか?」

ガングート

「勿論『シベリア送り25ブブル』だ!!」

「こころ

「なんですかそれ!?」

ヴェールヌイ

『-20℃冷凍庫の中で25日間水着姿でジャガイモの皮むきをする』事だよ。』

「あお、ここころ  
それもヤダア!!」

ガングート

「いや『冷房の効いた涼しい部屋で25分間反省文を書け』って事だつたんだが?」

ヴェールヌイ

「同士よ。銃殺刑から生優しくなつてないか?」

陸奥

「ガングート!!」

その時、たまたま通りかかつた陸奥が来た。

陸奥

「手荒な事しちゃダメじゃないの! その子達泣いてるじゃない!」

ガングート

「いや泣かしたのは同士ヴェールヌイ何だが？」

陸奥

「館内放送聞いてた？その子達見学中に迷子になつた子達よ。見つけ次第保護してくれつて。」

ヴェールヌイ

「同士よ。この二人を銃殺しようとしてなかつたか？」

ガングート

「その後貴様は冷凍庫にブチ込もうとしてなかつたか？」

陸奥

「通り掛かつてよかつたわ。」

「こころ

「あの、お姉さんは?」

陸奥

「私?長門型戦艦二番艦の『陸奥』よ。よろしくね!」

あおとこころは無事に陸奥に保護され、ガングートとヴェールヌイは仕事に戻った。  
一方工廠ではと言うと。

轟雷、ステイレット、バーゼラルド、マテリア、迅雷、アーキテクト、ラキたま、メロリー、キラリス、おシャキ、ゲラチヨ、モグタン、サリーヌ、パリーヌ、ミシル  
「出してええええ!!!」

明石と夕張に捕まり、虫カゴの中に入れられていた。

轟雷

「お願ひです!出してください!!」

明石

「いや、流石に得体の知れない物を放つて置くわけにも行きませんし、問題が解決するまで大人しくしてもらいます。けどその前に。」

明石、夕張

「フレームアームズガールの身体を分解させて〜！」

轟雷、ステイレット、バーゼラルド、迅雷

「ヤダアー！！

アーキテクト

「理解不能。」

クロ

「このおばさん達頭大丈夫かしら？」

シロ

「頭の中はお婆ちゃんじやないの?」

二人はフレームアームズガールと聞いて興奮していた。

明石

「一度フレームアームズガールの構造を見てみたかったんです!!」

ステイレット

「だからってなんで私達が分解されなきやいけないのよ!やめなさい!!」

夕張

「大丈夫!分解した後も必ず元に戻すから!」

バーゼラルド

「身体バラバラにされるのヤダ!!」

ラキたま

「やめろよ！嫌がつてんじゃないか！」

メロリー

「暴力反対なの!!」

だが彼女達の反論も無視して明石と夕張はフレームアームズガールを取り出そうとしていた。その時だつた。

夕張

「フギヤ!?」

明石

「キヤハツ!?」

???

「やれやれ。改造中に何をやっているんだ。これでは艦装の完成は明日一杯になつてしまふな。」

突然一人は氣絶して倒れてしまった。二人の背後にいた女性が殴つたからである。

轟雷

「あの・・・貴方は?」

長門

「私か?私の名は戦艦『長門』。いや、此度改造をしてパワーアップした戦艦『長門改二』だ!」

改造を受けていたのはなんと長門だった。実はイベント終了後、大本営から新たな艦娘の改二の連絡が入った事を知った信長は改造に取り掛かっていた。それが長門とさるに熊野と由良だつた。だが長門以外話が来ているだけでまだ改造は出来ない。

大規模作戦

長門

「なるほど、そう言うことか。」

長門はラキたまと轟雷から自分達の存在とこれまでの事を、提督室に向かいながら聞いていた。

長門

「感心せんな。自分達の提督の言いつけを破り、勝手な行動をするとは。」

轟雷

「軽率でした。本当にごめんなさい！」

長門

「謝る相手が違うぞ。とりあえず提督に報告せねばな。」

ラキたま

「待つて！ぼくたちにんげんに見られるときえちやうんだよ！」

長門

「なら問題ない。この基地には『ギャグ補正』というシステムが付いているからな！提督に見られても大丈夫だ！」

ステイレット

「なんの説明にもなってないけど!?」

しばらくして長門達は提督室に入り、信長に事情を説明した。その頃陸奥達も提督室の近くまで来ていた。

陸奥

「貴方達のお友達、私の姉が見つけてくれたみたいよ。」

「こころ

「陸奥さんのお姉さん？」

陸奥

「長門型戦艦の一番艦よ。今提督室にいるわ。貴方のお友達も一緒にね。」

陸奥達も提督室に到着した。そこには、轟雷やラキたま達を連れた長門と、ヴェールヌイとガングートもいた。

陸奥

「あら長門。改造済んだみたいね。」

長門

「だが艦装は明日になつてしまふがな。」

信長

「ご苦労だつた陸奥。」

陸奥

「大惨事にならなくてよかつたわ。」

あおとこころは緊張しながら信長の前に出た。

信長

「さてお前達、この二人に何か言う事があるんじやないか?」

すると轟雷とラキたま達は、信長の言われるままに一人の方を振り向いて頭を下げた  
のだ。

ラキたま

「…ごめんなさい!!」

メロリー、モグタン、ゲラチヨ、キラリス、おシャキ、サリーヌ、パリーヌ、ミシエ  
ル

「ごめんなさい!!」

轟雷

「あお！」迷惑をお掛けしてすいませんでした!!」

ステイレット、バーゼラルド、マテリア、迅雷、アーキテクト  
「ごめんなさい!!」

あお

「ちよつと!? どうしちやつたのみんな!?」

こころ

「今日はなんか積極的に謝つてるけどどうしたの!?」

長門

「提督がお前達に代わつてこの子達に説教をしたところだ。」

信長

「話は聞かせてもらつた。ガングートに銃殺されそうになつたあげく、  
証拠隠滅で冷凍

庫の中にぶち込まれそうになつたそつだな。」

ガングート

「いや銃殺だけなんですかけど?」

陸奥

「銃殺もダメに決まつてゐるでしょ!!」

轟雷

「そんな酷いことされそうになつたんですか!?」

ラキたま

「なんでそんな事するんだよ!!」

ガングート

「この二人が軍規違反を犯したからに決まつてゐる!!」

信長

「軍規違反で罰する前に先ずワシに報告せんか!!」

みんなも、先生や上司の報告ホウ・連絡レン・相談ソウはしつかりやろうね。

信長

「家のガングートが迷惑をかけてすまなかつた。此奴はこの鎮守府に来て日が浅くつな、まだ知らない事ばかりなんだ。許してやつてほしい。」

あお

「いえ! それより私達の方こそすいませんでした! 勝手に基地の中に入つたりして!」

一二一

「本当にごめんなさい!!」

お互いご迷惑を掛けたと言う事で謝罪した。

ガングート

「私もすまなかつた。まだソ連時代の癖が直つていないうようだ。」

信長

「そういやいい加減北方領土返せよ。」

ガングート

「今頃聞くのか?」

その翌日、無事に四葉<sup>アリエ</sup>こころとこことま達、源内あおとフレームアームズガール達は、無事に家に帰つていつた。いろいろあつたが、今回のイベントはわずか一週間と早めの期間で終わつた。

信長

「まあ全部『丙』だつたから、装備はいいの手に入らなかつたがな。」

続く。

# このハゲー!!

梅雨の季節となつた六月。佐世保鎮守府は、今日も変わらぬ日々を送つていた。

夕張

「うーん、やっぱりなんか違うんだよねー。」

由良

「そうかな? 阿武隈ちゃんや鬼怒ちゃんと同じ制服なんだけど、何か変かな?」

この日工廠では、由良改二の改造を夕張が手伝つていた。

夕張

「やっぱりこのスペツツ由良に合わないから脱がすね!」

由良

「え！ ちょっと！ 夕張！？」

その時だつた。

信長

「夕張。由良の改造はどうなつてゐる。」

信長が由良の様子を見に工廠に入つた。

夕張

「えい！」

由良

「ヒヤツ！」

信長

「あ（ビンク）。

夕張は、由良が着ていたスパツツだけを脱がすつもりだったが、同時に下着までズレ落ちてしまい、そこを信長に見られてしまつた。

由良

「提督さんのエツチイイイ!!」

信長

「ヘブッ!!」

その後由良とは気まずくなり、お互い口を聞かなくなつた。

鈴谷

「で頬っぺたにビンタの後が残つていると？」

信長

「それから由良がワシを避けるようになつてしまつたんだが、どうしたらいい?」

熊野

「自業自得ですわ! フンッ!」

そして信長は提督室にて鈴谷と熊野に相談していた。だが何故か熊野は不機嫌だった。

実は、熊野の本人は由良ではなく自分が改造すると思つていたらしく、改造設計図に必要な勲章の最後の一ヶをカレー洋リランカ島沖を熊野自身も出撃し、やつとの思いで攻略し、信長に報告したが由良を改造する事実を聞かされ不機嫌になつてしまつたのだ。

信長

「いや、今改造待ちの艦娘つて全員改造設計図が必要な艦ばかりなんだ。リツトリオもローマも改造できるLevelを過ぎているが、ある程度のどこまで上げている。」

鈴谷

「そういうや鈴谷の時も改造設計図有りだつたつけ？まああの時は改造設計図はあつたけどLeve<sup>ル</sup>l1が足りなかつたから出来なかつたけどね。」

信長が鈴谷と熊野を呼んだのは、由良の相談だけでなく、熊野のご機嫌取りのために二人を呼んだのだ。

信長

「いい加減機嫌を直せ熊野。改造は出来なかつたが、お前達の此度のリランカ島沖の報酬はこれで我慢してくれ。」

信長が取り出したのはなんとケーキだった。しかも、熊野が食べたがつていたお店のケーキだった。

熊野

「これ、よろしいんですの?」

信長

「お前に変な期待をさせてしまったお詫びだ。これで許してくれ。」

熊野

「まあ、もらつて上げてもいいけど。」

熊野は素直になれなかつたが内心嬉しかつた。その後は、三人で楽しくアフタヌーンティーを楽しんだ。

熊野

「これなら来月までの改造我慢できますわ!」

信長

「え? 来月ビスマルクの改造予定なんだが?」

ブチツ！

信長の一言で熊野の何かが切れた。

天龍

「やつと作戦完了で艦隊帰投か。おせーな、ちやつちやとやれよ。」

深雪

「遅いの天龍さんじやないの？」

天龍

「夕張と一緒にすんな！」

遠征から第二艦隊（天龍、龍田、深雪、初雪、白雪、磯波）が帰投し、天龍がドアを開けようとしたその時だつた。

熊野

「このハゲエ!!」

天龍

「なんだ!?」

突然提督室から怒鳴り声が聞こえてきた。

熊野

「違うだろ！違うだろ！違うだろ!!」

信長

「ちよつ！痛い！痛い！」

熊野

「私の心が痛いよ!!」

信長

「ちよつと!? もう素手で殴つてるんだけど!?」

熊野

「これ以上私の心を傷つけるな!!」

信長

「これ以上ワシを傷つけるなあ〜!!」

熊野

「これ以上私の評判を下げるなあ!!」

信長

「もう下がってる〜!!」

熊野

「バカかお前は!!」

信長

「はわッ!!」

信長が殴られた後提督室が静かになつた。

熊野

「全く! 失礼にも程がありますわ!!」

機嫌を悪くした熊野が提督室から出て来てどこかへ行つてしまつた。彼女の行動に天龍は唖然とし、とりあえず鈴谷に事情を聞いた。

天龍

「おい鈴谷。今熊野議員が機嫌悪く立ち去つて行つたが何があつた?」

鈴谷

「別に気にしなくていいよ。熊野の『機嫌を損ねた提督が悪いから。』

自業自得である。そして次の日、嬉しい知らせが届いた。

阿武隈

「艦隊が帰投しました！」

信長

「阿武隈。確か輸送船団護衛の旗艦は由良に一任した筈だが？」

阿武隈

「さあ？先に入渠してくるから報告よろしくねって。」

信長

「そうか・・・。」

輸送船団護衛艦隊は由良、阿武隈、吹雪、睦月、如月、夕立のメンバーだが、由良は信長と顔を会わせられず、ドッグに行っていた。

阿武隈

「それより提督見て見て！新しい子ドロップして来たよ！」

信長

「は？誰？」

その艦娘は彼女であつた。

大淀

「問おう。貴方が私のマスター提督か。」

信長

「お前はどこの騎士王だ。」

念願の大淀が遂に出撃可能になつたのだ。

信長

大規模作戦

「大淀。今日から演習艦隊に入れ。次のイベントにお前を主力艦隊に加える。心してかかれ。」

大淀

「わかりました土郎！」

信長

「土郎じゃねーし。もうテンション上がり過ぎて別キャラになつてんだけど？」

それ程嬉しかつたらしい。

吹雪

「司令官。運営から指令書が来ていました。」

信長は吹雪から指令書をもらい中身を確認した。その時、彼の表情が変わった。

信長

「吹雪。各艦に通達。鎮守府の掃除と寮の部屋を確保せよ！」

吹雪

「あの、何かあるんですか？」

信長

「ある団体がしばらくこの鎮守府に滞在する事になる。その準備をこれから執り行う。光秀、イヨクはある場所に向かい先方に会つてこい。」

二人は信長はその場所の書かれたメモを見て驚いた。

光秀

「司令！これは一体どういう事ですか!?」

光秀達はこれを見て信長に猛反発した。

光秀

「前回の社会科見学といい、一般人を基地内に入れるなど前代未聞です!!」

イヨク

「上層部は何を考えているんだ！」

信長

「わからん。だが命令に背く訳にはいかぬ。ならこちらから早急に対応するまでだ。」

大淀

「あの提督。指令書に何が書かれていたんですか？」

信長

「知ってるか大淀。『アイカツ！5周年』だそうだ。」

大淀

「は？」

艦娘達は信長が何を言つてているのかわからなかつた。指令書に書かれていたのは、『スター・ライト学園』『ドリームアカデミー』『四ツ星学園』『ヴィーナスアーク』with『神崎美月』『夏樹みくる』による『アイカツ強化合宿 in 佐世保鎮守府』というイベントを行うため、佐世保鎮守府をその場所として使うのだ。残念ながら『白鳥ひめ』『如月翼』『二階堂ゆず』『香澄夜空』は仕事のため参加していない。

つまり今回のゲストは、『アイカツ! & アイカツスターズ!』なのだ。

光秀

「では司令、我々は先方の挨拶に行つてきます!」

吹雪

「あの明智大佐。その『あおい』と書かれたアイドルグッズ置いてつて下さい!」

イヨク

「明智大佐！遊びじゃないんだぞ!!」

夕立

「その『AOI』って書かれたうちわ何つぽい？」

信長

「仕事だぞ!!てかお前ら『霧矢あおい』ファンか!?」

光秀、イヨク

「あおいちゃんは穂やかじやありません!!」

大淀

「穂やかじやないのはお前らの頭の中だ。」

数日後、彼女たちは鎮守府に到着した。

織姫

「『スター・ライト学園』学園長の三石織姫です。」

ティアラ

「『ドリームアカデミー』学園長の夢咲ティアラと申します。」

諸星

「『四ツ星学園』学園長の諸星光です。」

エルザ

「『ヴィーナスアーク』オーナーのエルザ・フォルテです。」

信長

「佐世保鎮守府艦隊司令長官の織田信長海軍中将です。」

吹雪

「秘書艦を務めています、特型駆逐艦の吹雪と申します。」

大淀

「軽巡洋艦 大淀です。」

信長

「現時刻をもつて三ヶ月間、各学園のアイドルをお預かりします。粗相のないようこちらも注意深く対応させて貰います。」

と言つてるそばから早々、問題が起きた。

いちご

「着いた!!」

あおい

「ここが佐世保鎮守府！」

蘭

「まさか海軍基地でアイカツするとはな。どうだつたんだいちご。アメリカでアイカツ

ブートキャンプした時、軍人さんに厳しい特訓させられたんだろう?」

きい

「もう・・・地獄だった。」

蘭

「そりやドリアカもやつてたんだつけ?」

金剛

「HEY! girls!! こっちに注目ネ!」

何故か金剛が勝手に進行していた。

「Welcome 佐世保鎮守府へ!! 私は英國生まれの帰国子女! 金剛デース!! これからYOU達を基地に案内しマース! みなさーん! 着いてきて下さいネ!」

光秀

「何してんですか金剛さん!!」

金剛

「勿論! アイドルの girl 達に基地を案内しようとしてましタ!」

光秀

「勝手な事はやめて下さい!! てかあなた方艦娘は指令があるまで待機のはずでしょ!?」

だが金剛だけではなかつた。

那珂

「みんなー! 注目!!」

朝礼台ではしやぐ那珂もだつた。

那珂

「艦隊のアイドル！ 那珂ちゃんだよ!! よろしくねー!!」

あおい

「誰あの子！ 穏やかじゃない！」

蘭

「見慣れないアイドルだな？」

川内

「ごめん。あれ自称アイドルだから。」

神通

「妹がご迷惑をお掛けします。」

妹を心配してか、川内と神通も駆けつけてきた。

隼鷹

「凛ちゃん！お久ー！」

凛

「隼鷹さん！」

何故か、隼鷹も入ってきた。しかも二人は知り合いみたいだ。

隼鷹

「この前はありがとうございました！仕事中に無理言つてサイン貰つたりして。」

凛

「いいえ、お安い御用です！提督さん喜んでましたか！」

隼鷹

「大喜びだったよ！ほんの数分だけ。」

凛

「数分?」

更に朝礼台の上に立っていた那珂もだつた。

セイラ

「那珂!」

那珂

「あつ! セイラちゃん!」

『音城セイラ』に呼ばれた那珂は、朝礼台から下りると、隼鷹達も集まってきた。

那珂

「この前はありがとうね!」

セイラ

「気にしないで！提督さん喜んでた！」

那珂

「うん！ほんの数分だけ。」

セイラ

「数分？」

凛

「あの数分って何かあつたんですか？」

隼鷹

「いや、それが提督にサイン渡した後。」

隼鷹、<sup>秘書艦事務員</sup>那珂  
「吹雪と大淀にボコられてサイン燃やされた。」

セイラ

(さすが海軍基地だ。プライベートにも厳しいのか。頑張らないと!)

凛

(今回のアイカツ強化合宿頑張ないと!)

飛鷹

「その後、この二人対潜水哨戒の部隊から外されたんだけどね。」

セイラ、凛

(御愁傷様です。)

それを見ていた信長の行動は、

信長

「家の艦娘がご迷惑をお掛けしてすみませんでした!!」

各学園長達に全力で謝罪することだった。

吹雪

「司令官も大変だな。」

その後各学園長は帰り、信長とアイドル達と大淀、吹雪、光秀、イヨクが司令室に集められた。

信長

「諸君らには三ヶ月間、この佐世保鎮守府に滞在してもらうが、知つての通りここは軍事基地だ。一般人でも入つてはいけない設備が多数存在する。立ち入り禁止の看板は立てておくが気をつけるように。」

おとめ

「それでも入つたらどうなるんですか？」

信長

「家の艦娘が拳銃でお前の頭を狙い撃ちます。」

おとめ

「気を付けます!!」

大淀

「冗談はさておいて、本当に気を付けてくださいね。先月家に入ってきたばかりの艦娘が見学で訪れた一般人を銃殺しようとしたことがありましたので、迂闊に立ち入り禁止区画に入つたら死ぬと思つてください。」

信長

「そこまで念押ししなくてもよくない?」

アイドル達

(なんかとんでもないところ来ちゃつた?)

光秀、イヨク

(なんかとんでもないところ配属されちゃつた?)

いいえ。前回とんでもない艦娘が来ちゃつたからである。

信長

「そう言えばさつきの話で思い出したんだが、あいつ改造したんだつけ?」

大淀

「ええ、先月に改造を済ませました。」

信長

「名前も変わつたんだつたな。確かにオカアチヤンクチヤクチヤ・T・M・r・e・v・o・l・u・t・i・o・nだつたか?」

大淀

「キモ。」

その時だつた。

ガングート

「オクチャブリスカヤ・レヴオリューツィヤだ!!」

噂を聞きつけて、ガングートが司令室に入ってきた。

信長

「皆紹介しよう。この前小学生を殺そとしたロシアの戦艦ガングートだ。」

ガングート

「なんて紹介してるんだ!? てか私の名前はオクチャブリスカヤ・レヴオリューツィヤだ」と言つてゐるだろ!!」

信長

「その名前言いづらい。」

ガングート

「何だと!?」

結局ガングートと呼ばれるようになつたが、本人は納得してないようだ。

信長

「さて話を戻すが、そう言つた立ち入り禁止場所に勝手に入つて何かあつては遅い。そこで！諸君らにはある書類にサインをしてもらう。」

だが信長が取り出したのは書類ではなく色紙だつた。

蘭

「あの。」

信長

「ん？なんだ？」

蘭

「それ・・・なんですか？」

信長

「見ての通り、これにサインを書いてもらう。だがただのサインではない。お前達の持つアイドル特有のサインで書いてもらう!!」

光秀

「しかも一人3枚ずつでお願いします!!あと指紋認証の為に握手もお願いします!!」

イヨク

「後、右下に小さく我々の名前も!!」

ギャングート

「書き終わったら私の名前を呼んで間違つてたらその場で銃殺刑にしてくれる!!」

ガツンッ!

ゴツンッ!

バコンツ！

ドッカーンツ!!

信長、光秀、イヨク黒焦げ重症。ガングート大破炎上中。

大淀

「大変申しわけありません。こちらの書類に普通のサインをお願いします。」

アイドル達

(大丈夫かな? ここ?)

こうして彼女達の佐世保鎮守府でのアイカツが始まつた。次回、信長に悲劇が襲いかかる。そして由良との関係も回復にあらず。

もはや声ネタである。

暑い季節となつた七月。アイドル達や艦娘達もまた暑いアイカツと艦これに励んでいた。

摩耶

「で？何してんだお前等！」

摩耶、鳥海、古鷹、加古、利根、筑摩は、基地の裏手にある崖に来ていた。

いちご

「何つて崖登りですけど？」

いちご、あかり、ゆめの三人でランニング後、ロッククライミングをしていたが、問

題がある。彼女達は命綱をつけていない。

利根

「命綱無しで崖登りするアホがいるかあ!!」

あかり

「あのー！命綱付けて登るとアイカツにならないんですけどー！」

古鷹

「いいから降りてきて!! 危ないよ!!」

ゆめ

「大丈夫ですからー!!」「心配なくー!!」

利根

「心配するわ馬鹿者!!」

利根達もヒヤヒヤしながら見ていた。

摩耶

「こうなつたら私等もやるぞ!!」

加古

「よつしやーー・漲つてきたよ!!」

鳥海、古鷹

「だから真似しちゃダメー!!」

利根

「やめんか！馬鹿者!!」

何故か摩耶も加古も登ろうとしていた。そしていちばん達は、

あかり

「うわあ！きれい！」

ゆめ

「辺り一面海だ！」

いちご

「ヤツホー!!」

あかり

「先輩？山じやないんですから。」

いちご

「高いところ登つたら何だか叫びたくなっちゃつて…」

ゆめ

「ヤツホー!!」

あかり

「ゆめちやんも？じやあ私も！ヤツホー!!」

頂上で満喫していた。

摩耶

「ファイトオオオオ!!」

加古

「イッパアアアアツウ!!」

その頃、摩耶達は中間地点まで登っていたが、加古が足を滑らせて大変な状態だつた。

摩耶

「あつ。」

加古

「あつ。」

摩耶の掘んでいた岩が崩れた。

摩耶、加古

「うをおおおお!!!」

鳥海、古鷹

「うわあああ!!!」

ドツカーンッ!!!

とそのまま二人は落下し、二人を庇った鳥海達と共に大破した。

いちご

「あのー！大丈夫ですかー!!」

利根

「大丈夫なわけあるかあああ!! 早く降りてこい!!」

そして摩耶、鳥海、古鷹、加古はドッグへ行き、利根達は司令室に行つた。

信長

「話はわかつた。すぐ4人を入渠せろ。」

大淀

「わかりました。」

いちご

「ごめんなさい。私達の所為で摩耶さん達に大怪我させちゃつて。」

信長

「気にするな。あいつ等は我が鎮守府が誇る主力艦隊所属の艦娘達だ。崖から落ちた程度で死にはせん。」

利根

「伸びてはおつたがの。」

信長

「これに懲りたら二度と危険な行為はするな。」

いちご、あかり、ゆめ

「はい。すいませんでした。」

利根

「ところで提督よ。何処か出かけるのか？スーツなんか着おつて。」

信長

「実は本業で働いていた先輩が亡くなつてしまつてな、これから通夜に行つてくる。」

利根

「そうか。それは御愁傷様じやの。さぞ尊敬できる先輩であつたろうに。」

信長

「尊敬できる先輩ではなかつたが、いろいろお世話になつた人だつた。」

だが信長の悲劇はこれで終わりではなかつた。

信長

「何だと・・・。」

信長の出張中に長年付き添つて來た彼の愛犬が亡くなつてしまつたことだ。この時  
から、信長の様子がおかしくなつていた。

きらら

「気持ち良かつた!!」

信長が出張から戻つて来た翌日、ヴィーナスアークのエルザ・フォルテ、花園きらら、騎咲レイは入浴を済ませ、浴室の休憩所で休んでいた。

きらら

「お風呂は良かつたけどここボロ臭いの!!」

レイ

「確かに、エルザが過ごすには流石にここは古すぎる。提督さんに言つて部屋を変えてもらおう。」

エルザ

「わがままを言つてはダメよ。」

レイ

「エルザ?」

エルザ

「私達は無理を言つて施設を借りてるのよ。これ以上の要求は失礼に値するわ。完璧なアイドルを目指すならそれぐらいの配慮は必要よ。」

レイ

「なるほど、確かに少しづがままが過ぎたようだね。」

エルザ

「それにいいじゃない。こう言うレトロな感じの建物は嫌いじゃないわ。」

熊野

「いいえ。貴方方は提督にいろいろ要求した方がよろしくてよ。」

エルザ達の話を聞いていた熊野と鈴谷が突然割り込んで来た。

エルザ

「貴方方は?」

熊野

「最上型航空巡洋艦四番艦の熊野と申します。」

鈴谷

「同じく最上型航空巡洋艦三番艦の鈴谷だよ！ よろしく！」

熊野

「エルザさん。いくら海軍基地とはいって、遠慮する必要はありません。要望があれば提督に進言しても構いませんよ。」

エルザ

「ですがそれではそちらに（）迷惑では？」

熊野

「構いません。むしろ提督をうつ病にするくらいのわがままを言つて差し上げて下さい。」

エルザ

「貴方提督さんに何か恨みでもあるの？」

前回の話しだとあります。

熊野

「エルザさん。『ブランドを制する者はアイカツを制する』それが貴方の信条でしたわね  
?」

エルザ

「ええ。アイドルにとつてドレスは魂のようなもの。ドレスを身に纏う事でその輝きを  
放つ。そして、ブランドを制した者はアイドルの頂点に立つ事ができる。」

熊野

「それは艦娘も同じ事です。家には『装備を制する者は艦これを制する』と言う言葉があります。」

鈴谷

「そんな言葉あつたつけ？鈴谷初耳なんだけど？」てか明らかにエルザちゃんのパクつたよね？」

熊野

「貴方方アイドルがアイカツカードを選んで様々なコーデで人々を魅了するように私達艦娘もまた、装備を選ぶ事で様々な戦いをする事ができます。」

きらら

「言つてる事よくわからないの？」

レイ

「こう言いたいんだよ。アイドルがアイカツカードでいろんなコーデをするように、艦娘は武器でいろんな戦いをする事ができる。やつてる事は一緒つて事だよ。」

熊野

「その通りです。ですがそれは自身を成長させなければ見に纏う事など出来ないでしょ  
う。例えドレスだと、装備だと。」

エルザ

「未熟な者がプレミアムドレスを纏えば輝きが失われるどころか、醜いステージを  
披露する事になる。貴方方艦娘もそれは同じで、どれだけ優れた武器を持つても使い手  
が弱ければただのガラクタ。」

熊野

「そうですわ。なのに・・・なのにあの提督は・・・うわあああん!!!

エルザ

「熊野さん!?

きらら

「何か悲しい事でもあつたの!?」

鈴谷

「それがこの前提督と揉めちゃつて。」

熊野

「エルザさん。お話を聞いてもらえますか。」

エルザ

「伺いましょう。」

熊野は前回の話を三人に話した。

きらら

「なにそれ!? メーかも!」

レイ

「確かに酷い話だ。熊野さんじやなくて新人を先に改造するなんて！」

熊野

「そうですのよ！なのにあの提督ヒゲは「え？来月ビスマルクを改造するんだけど？」とか言いましてよ？ありえなくない！」

鈴谷

「熊野の言動がありえないよ。」

エルザ

「聞けば鈴谷さんと熊野さんは第一艦隊の主力のはず。なのに異国の新人さんを優先するなど以ての外です。」

熊野

「エルザさん・・・。」

エルザ

「私も熊野さんに改造してもらうよう提督さんを説得しましよう。だから熊野さん！立  
ち上がりなさい!! 貴方の為に!!」

熊野

「エルザさん！ 私頑張りますわ!!」

鈴谷

（あの提督だから無理だと思うけどな。）

そう思いつつ提督室へ向かつた。

エルザ

「と言うわけで、直ちにビスマルクさんの改造を中止し、熊野さんを改造してください  
！」

光秀、イヨク

（なんでアイドルが艦隊指揮に口挟んでるの!?）

司令室にいた信長や光秀、イヨクを含め、大淀、吹雪も同じ事を思っていた。

イヨク

「お言葉ですがエルザ殿！いくらフォルテ家の御令嬢と言えど、艦隊指揮に口を挟まないでいただきたい!!」

エルザ

「ですが実力では熊野さんが上のはず！なのに実力が未だ不明のビスマルクさんを先に改造するとは理不尽かと思いますが？」

イヨク

「あんたそんなんだといつか世界中のテレビの生中継で国民の前で「ごめんなさい!!」つて泣き叫びながら謝るはめになりますよ?!」

エルザ

「しないわよ!!そんな恥ずかしいこと!!」

光秀

「そんでお母さんになつたら「夫の初めてを奪つたこの技から逃れる事は出来ない！」とかやりかねないですよ!?」

エルザ

「誰がそんなアホな事するかあ!!てか話聞いてる限りやつた人いるでしょ!?誰なのそれ!!」

大淀、吹雪

(あんたと同じ声の人や。)

もはや声ネタである。

熊野

「さあ提督！皆さんも同じ意見ですので考え方改めさせてもらいますわよ！」

熊野とエルザの訴えに對して信長は冷静に答えた。

信長

「熊野。来月何があるかわかつてないか?」

熊野

「え? ここの時期家がブラック鎮守府になるイベント?」

信長

「そうだ。作戦海域によつてはお前が必要な時がくる。今改<sup>大規模作戦</sup>造すれば近代化改修が間に合はず、お前無しでのイベントは攻略不可能に近い。わかるか?」

熊野

「はあ? わかりました。」

信長

「なら全員下がれ。」

信長の言う通りに熊野達は下がつたが、熊野と鈴谷そしてエルザも信長の異変に気付いていた。

レイ

「提督さんも熊野さんの事考えがあつて動いてくれてたみたいだね。」

熊野、鈴谷

「い。」

レイ

「い？」

熊野、鈴谷

「いつもの提督じやね。」

レイ

「え？」

エルザ

「確かにいつもの提督さんではなかつたわ。」

大淀

「やはり皆さんもお気づきでしたか。」

業務を終えた大淀、吹雪、光秀、イヨク達も部屋から出てきた。

大淀

「いつもの提督ならエルザさんの最初の話で「なんでアイドルが軍の艦隊指揮に口挟んでんだあ!?」というツッコミが来てもおかしくなかつたのですが。」

エルザ

「私の話全然聞いてませんね。」

イヨク

「様子がおかしいと思いエルザさんをネタにしましたが「それ『戦姫絶唱シンフォギア』のマリアだろお!?」というツッコミが帰つて来ませんでした。」

光秀

「そこで私も後から続きましたが「それは『アホガール』のよしこのお母さんだろお!?」というツッコミが帰つて来ませんでした。」

ブチツ!

エルザ

「アイカツよ! 私は帰つて來た!!」

光秀、イヨク

「はわあ!?」

エルザ・フォルテの放つたアトミックバズーカにより2人の将校は爆撃処分された。

エルザ

「大淀さん。私達のアイカツに影響はないのかしら？」

大淀

「そちらは影響ないと思いますが、問題は家です。」

エルザ

「御愁傷様です。」

だが事は思つた以上に深刻だつた。それは、金剛の『ケツコンカツコカリ』の話であつた。

あかり

「うわあ！金剛さん素敵！！」

スミレ

「ウエディングドレスだ！」

ひなき

「もしかして提督さんと!?」

霧島

「ええ、金剛お姉様の Level<sup>ベル</sup>が 99 に達したので、その限定解除の儀式『ケツコンカツコカリ』を執り行います。」

ひなき

「(仮)？」

そこには大空あかり、氷上スミレ、新条ひなきのルミナス三人と金剛型の姉妹達が提督室に集まっていた。

金剛

「データーク！ 戦艦金剛はLevele 199になりましタ！ さあ！ 式をあげるデータース!!」

信長

「そうか。これかもよろしく頼む。以上だ。」

金剛

「え？ それだけ？」

信長

「それだけだ。遊んでないで着替えて業務に戻れ。」

その一言で、金剛の目から涙が溢れていた。

金剛

「データードグのバガアアアアア!!!」

金剛は大泣きしながら提督室から出て行き、それを見た大空あかりは信長に激怒し

た。

あかり

「なんであんな酷い事言えるんですか!! 金剛さんだつて提督さんの為に頑張つて來たんですよ!! 今から追いかけて謝つて下さい!!」

比叡

「あかりちゃん。 そこまで。」

あかり

「比叡さん!?」

比叡

「(バ)迷惑をお掛けしました! 直ぐに艦隊行動に戻ります!」

信長

「なら下がれ。」

比叡の対応にあかりはおろか、榛名と霧島も驚いていた。

比叡

「はい、撤収撤収！」

比叡はみんなを連れて提督室を出たが、あかりは納得できなかつた。

あかり

「なんでも言わなかつたんですか!? お姉さんが泣きながら出て行つたんですよ!! 比叡さんは悔しくないんですか!?」

比叡

「そんなわけないでしょ・・・あのヒゲ今直ぐ血だるまにして十字架に縛り付けて砲撃戦の的にしてやりたいくらいよお!!」

霧島

「比叡お姉様の方が噴火してましたね。」

ひなき

「言つてること怖いよ。」

爆発寸前でした。

榛名

「ですが何故比叡お姉様はあの時冷静にいられたのですか？」

比叡

「お姉様もそうだけど、問題は司令よ。」

霧島

「司令・・・ですか？」

比叡

「いつもの司令じやないからよ！ 司令は人使いは荒いけど、艦娘を無下にすることはしない。だから何かあつたんじやないかって。」

スミレ

「じゃあ普段はあんなこと言わないんですね？」

比叡

「あたりまえよ！ アホでバカだけど、司令は艦娘を重宝する人よ。あんな事絶対に言わない！」

霧島

「お話を聞く限り、かなり深刻な問題ですね。」

ひなき

「そんなに深刻なんですか？」

霧島

「だつて……。」

霧島、榛名

「いつもの比叡お姉様じゃない!!」

ひなき

「え?」

霧島と榛名は何故か比叡を心配していた。

スミレ

「どうしてですか?」

榛名

「だつて比叡お姉様が真面なこと言つてるから!」

比叡

「ちよつとあなた達！普段私の事なんだと思つてゐるの!?」

榛名

「金剛お姉様 L O V E の？」

霧島

「年中無休お花畠？」

ひなき

「そんな比叡さんが真面目な事を言つてことは!?」

あかり

「提督さんだけじゃなくて、比叡さんまでおかしくなつちやつた!?」

霧島

「その通りです!!」

比叡

「私はいつも通りだあ!!」

信長がかなり重症化してたため、他の艦娘達にも影響が出始めていた。その噂は、リランカ島沖に出撃していた第一艦隊の艦娘達や、一部のアイドル達の耳にも入つてき  
た。

セイラ、きい、凛、まどか、ゆめ、ローラ、アコ、真昼  
「アイカツ！アイカツ！アイカツ！」

矢矧

「あのそれ言わなきやダメなの？」

セイラ

「無理にとは言わないけど気合い入るよ！」

矢矧

「そう言うものなのね。」

港ではドリームアカデミーの音城セイラ、冴草きいとスターライト学園の黒沢凜、天羽まどかと四ツ星学園の虹野ゆめ、桜庭ローラ、早乙女あこ、香澄真昼が矢矧、浜風、浦風らと共にランニングをしていた。

浦風

「やつと追いついた！」

浜風

「はっ・・・・速すぎます！」

矢矧

「あなた達だらしなさすぎよ！ それでも艦娘なの！」

浦風

「いや！ 矢矧さんはともかくなんでアイドル組はんな体力保つんや？ おかしいやろ？」

浜風

「確かに、2時間近くも走つてゐるのになんで息一つ切れてないんですか？」

セイラ

「こんなのまだまだ準備運動だぞ！」

浜風、浦風

「準備運動!?」

凜

「本番はこれから！頑張つて走ろう！」

浜風

(ああ・・・提督がファンになるのもわかるような気がする。この二人・・・カツコ  
良すぎ!!!)

この時浜風は音城セイラと黒沢凜に一目惚れしてしまつた。

浜風

「弱音を吐いてすいませんでした！音城教官！黒沢教官！」

セイラ、凜

「教官！」

浦風

「何言い出すんや浜風!?」

完全に一目惚れしていた。

浜風

「それでお二人にお願いがあります！私を弟子にして下さい!!」

セイラ、凜

「弟子!?」

ゆめ

「大丈夫ですかあれ?」

矢矧

「何言つてるの?これもまたアイカツよ!」

浦風

「矢矧さん!?もうアイドルのすることやないからね!?」

ローラ

「面白いじゃない!!」

浦風

「何処に決め台詞ぶち込んだんのや!!」

きい

「浜風ちゃんのプロデュースはオケオケオツケーだよ！」

浦風

「家の浜風アイドルにしないでくれんか？」

セイラ

「いいよ！私達についてこれる！」

浜風

「そこまで行かんからな？」

浦風

「そこまで行かんからな？」

彼女達がそんな話をしながら休憩していると、リランカ島沖に出撃していた長門、大和、鈴谷、熊野、大鳳、初月が帰投した。それに気付いた彼女達は、長門達の方に行つ

たが、アイドル達にとつては悲惨な光景を目の当たりにした。

ゆめ

「大丈夫ですか!?」

ローラ

「酷い。」

鈴谷、熊野、初月が大破していたのだ。

熊野

「大丈夫じやありませんわ・・・改二になつてればあんな夜戦マスなんかに手こずらなかつたのにいいい!!」

鈴谷

「鈴谷改二だけどボロボロだよ?」

ゆめ

「じゃあ熊野さんが改二になればいいんですよね？提督さんに頼めばいいんじゃないですか!!」

鈴谷

「いや～それがもう頼みに行つたんだけど断られちゃってさ！」

ゆめ

「じゃあ今度は私も一緒にお願いします！」

鈴谷

「ごめん。既に熊野がエルザちゃん利用して頼み込んだらダメだつた。」

あこ

「エルザ・フォルテを利用した!?」

ゆめ

「熊野さん？」

熊野

「私彼女を騙したつもりはありませんでしたわ。」

そのつもりだつた。

大鳳

「ところでそこにある彼女は何故ウエディングドレスを着て泣いているんだい？」

浜風

「え？・うわあ！金剛！？」

先ほど、提督室から泣きながら出て行つた金剛が座つていたが、みんなが集まる前か  
らいたのに何故気がつかなかつた？

長門

「そんな格好でなんで泣いてるんだお前は？まあその格好で予想はつくが。」

ケツコンカツコカリである。

金剛

「説明するのがめんどくさいから省略して言うけど、私提督に「カクカクシカジカ」つて言つたノ。」

長門、大和

「うんうん。」

金剛

「そしたら提督に「マルマルウマウマ」つて言われてショックだつたヨ。」

長門、大和

「は？」

金剛

「だからワタシ提督に言つてやつたの。『ダレがツルツルピカピカじやい!!』つて！そん  
で提督室飛び出してここにいるつてわけ。」

長門、大和

「はああああ!?」

セイラ、きい、凛、まどか、ゆめ、ローラ、あこ、真昼

(なんであれでわかるの？)

長門

「提督と言えどこれは許せぬ！」

大和

「ちよつと提督室行つて46ぶつ放してきます！」

矢矧

「よくわからないけど提督死ぬからやめなさい。」

真昼

「すいません。なんでわかるんですか？」

長門

「何を言う？ 海軍では敵に情報が漏れぬよう暗号化しているのだ。」

セイラ、きい、凛、まどか、ゆめ、ローラ、あこ、真昼

(あれ暗号だつたんだ。)

矢矧、浜風、浦風、鈴谷、熊野、初月

「そんなデタラメな暗号聞いたこと無いんですけど？」

セイラ、きい、凛、まどか、ゆめ、ローラ、あこ、真昼

(しかも知らない人たちいた。)

大鳳

「こんな暗号に意味があるとは思えない。」

長門、大和

「おい!!」

セイラ、きい、凜、まどか、ゆめ、ローラ、あこ、真昼  
 (ダメだこの人達。)

呆れるアイドル達だった。

まどか

「ところで結局提督さんと金剛さんとの間に何があつたんですか?」

長門

「あーそれ説明すると文字数が危ないからここでは省略させてもらうぞ。」

まどか

「適當過ぎます!!」

長門は金剛の置かれた状況を説明した。

野

「はあああああああ!!!!?」

初月

「うわあああああ!!!!」

当然彼女達も同じ反応であつた。

鈴谷

「てか初月だけなんで驚いてるの?」

初月

「いやみんなして当然叫び出すから?」

かなり荒れていた。

きい

「いくらなんでも酷すぎだよ!!」

セイラ

「乙女心なんだと思つてるんだ!!」

ゆめ

「今からみなさんが提督さんに抗議しましょう!!」

ローラ

「上等よ!」

あこ

「引っ搔き回してあげますわ!!」

真昼

「私の拳で一発喝入れてやるんだから!!」

矢矧

「そうね！胸を揉まれた借りは返すわ！」

まどか

「胸？揉まれた？」

鈴谷

「提督マジあり得ないし!!」

熊野

「あのヒゲエエエエ!!!今度言う今度はタダじやおかねええええ!!!」

凛

「ふん！弱い犬ほど吠えるとはよく言つたものだ！提督さんはこの『バニラチリペッパ』が一人、黒沢凛が強制してやる!!」

浜風

「それでは物足りません。あのヒゲ今直ぐ血だるまにして十字架に縛り付けて雷撃戦の的にしてやりたいくらいですよ!!」

浦風

「乗つたで浜風!!」

初月

「みんな少し落ち着こうよ。」

その時、何処からか安らぐような音色が聞こえてきた。

大鳳

「君達少し落ち着きたまえ。」

音の出どころは大鳳の持っていたカンテレと言う楽器だつた。

長門

「なあ大鳳。前から聞きたかったが、なんで出撃の時カンテレなんか持ってきてるんだ？」

大鳳

「これが無いと落ち着かなくてね。」

装甲空母『大鳳』。中破時でも艦載機を発艦する事ができる能力を持つていたため、その実績は優秀である。ちなみに建造時からずつとこのキャラである。

大鳳

「君が提督かい？出撃の時は気軽に声を掛けてくれ。私は君の期待通りに答えるだけだ。」

信長

「なあ瑞鶴。大鳳中身が継続高校のミカなんだが何かしたか?」

瑞鶴

「こつちが聞きたいわよ!!」

当時彼女の建造担当は空母の中でも運高く『幸運の空母』の異名を持つ瑞鶴だった。

大鳳

「あれは提督であつて提督では無い。」

長門

「どう言う事だ?」

大鳳

「彼は蟬<sup>セミ</sup>の抜け殻なんだよ。」

長門

「言っている事がわからないが？」

大鳳

「つまりだ。この事態を解決する方法は提督を攻略しないと進まないと言う事だ。」

長門

「なるほどな。大淀と吹雪に連絡だ！今晚提督の対策会議を行う！」

大鳳のアドバイスと長門、そして比叡の提案により、その日の夜基地内の艦娘達と光秀、イヨクが集結した。

吹雪

「吹雪と！」

「大淀と！」  
大淀

美月

「美月と！」

エルザ

吹雪、大淀、美月、エルザ

「抜錨！私達の提督を取り戻せ作戦会議！！イエー！！」

長門

「マジメにやれええええ  
!!!」

だが何故かアイドル達まで参戦していた。

大淀

「あの何故あなた方まで参加してんですか?」

美月

「話を聞いてやつぱり放つておけなくてね！私達も力になりたいんです!!」

大淀

「ですが、迷惑では？」

美月

「何言つてるの！これもまたアイカツよ！」

大淀

「長門さん。アイドルの活動つて何なんですかね？」

長門

「知らん。」

彼女達も参戦し、会議は始まつた。先ずは信長が何故ああなつてしまつたのか、それ

は二つの原因が考えられた。

利根

「そう言えば提督が出張に出掛けた前日、御通夜に行つておつたの。」

珠璃

「誰か亡くなつたんですか？」

筑摩

「提督が本業で働いていた人が心筋梗塞で亡くなつてしまつたんです。」

珠璃

「そんな事があつたんですか。かわいそうに。」

摩耶

「てかそれいつの話だよ？初耳だぜ？」

利根

「お前らが崖から落ちて大破炎上でドツクで入渠してた日じや。」

摩耶

「つまり？」

利根

「もつとわかりやすく言うとこの話の冒頭の時じや！」

摩耶、鳥海、古鷹、加古

「あそこから!?」

大淀

「てか今日まで知らなかつたんかい!!」

翔鶴

「あの心筋梗塞つてまたですか？」

利根

「またとはなんじや?」

翔鶴

「先月も提督のお父上が心筋梗塞に掛かり大変だったと言う話を聞いたので。」

利根

「そつちが初耳じや!?」

隼鷹

「てか提督の周りどんだけ心筋梗塞に掛かってる人いるの!?」

一、提督の知人の死。

ヴェールヌイ

「そう言えばこの前食堂で『志村どうぶつ園』を観ていた時、司令官もその番組を観てい

たんだが泣いてしまつてね。出張中にペツトが亡くなつたつて聞いたからその傷が癒えてなかつたのだろう。そこで思い切つて司令官に聞いてみたんだ。」

暁

「分かり切つてるのによく聞いたわね？」

ヴェールヌイ

「そしたら司令官が「ワシ愛犬の死に目にも会えなかつたあああああ！」つて泣きついて來たんだ。」

電

「司令官かわいそうなのです。」

暁

「その後響が司令官を慰めたのよね？」

ヴェールヌイ

「慰めたかどうかはわからないが」「司令官。離してくれないかな?」「え?」「いや離して、セクハラだから。ウザい。」「ああ・・・すまなかつた。」と言うやりとりがあつたぐらいかな?」

暁、電、雷

「響いいいいいいいい!!!」

ガングート

「お前が犯人かあ!?!」

二、信長の愛犬の死+ヴェールヌイのトドメの一言である。

蘭

「ペット亡くしてショック受けてる人にその言い方はないだろ!?!」

ヴェールヌイ

「じゃあ聞くけど蘭さんは変なおつさんに抱きつかれそうになつたらどうする?」

蘭

「そりや嫌だから避けるか全力で逃げるかだけど？」

ヴエールヌイ

「だろ。私は逃げることすら出来なかつた。だから・・・・突き離すしかなかつた。」

蘭

「だからって状況を見ろ！提督さんはセクハラしようとしたんじゃなくて慰めて貰いた  
かつただけじやないのか？」

ヴエールヌイ

「こつちからしたらいい迷惑だよ。」

蘭

「冷たいなお前。」

長門

「ん？ ちよつと待て。『志村どうぶつ園』は私も観てるがそれは食堂が混む時間帯のはずだぞ？ 私も含めて誰もが目撃してもおかしくないが？」

ヴエールヌイ

「私が観たのは録画だったから、誰もいなくて当然だよ。」

鳳翔

「じゃああなただつたのね？ あの日冷蔵庫から勝手に食料漁つて調理して食べていたのは？」

ヴエールヌイ

「やだな鳳翔さん。私は夜食を食べに来ただけだよ。それに司令官も食べていた。」

鳳翔

「提督は徹夜で仕事だつたから夜食を用意したの！ あなたの所為で提督翌朝の朝食取れなかつたのよ！」

ガングート

「損な役回りしたの結局提督か。」

鳳翔

「けどその日からだつたかしら？ 提督つたら「そうか、また昼に訪ねる。」って言つてそれだけで部屋に戻つたわ。いつもの提督なら「ワシの朝飯ないのおおおお!?」ってツッコミが来てもおかしくなかつたのですが？」

ベールヌイ

「やれやれ、司令官にも困つたものだ。」

暁、雷

「あんたの所為でしきょうが!!」

「響ちゃん反省するのです!!」

電

原因がわかつたところで早速対策を話し合つた。

阿武隈

「はい！」

最初に手を上げたのは阿武隈である。だがここである艦娘がいない事に気付く。

阿武隈

「由良ちゃんがいないんだけど誰か知らない？」

大淀

「アブお前なんでそれ今頃言うの？」

阿武隈

「言うタイミング逃して今言いました。」

由良がいない事だった。話を戻すが、ここで虹野ゆめから一つの提案が上げられた。

ゆめ

「ライブしましよう!!」

大淀

「ライブですか?」

ゆめ

「これだけアイドルがいるんです!皆さんで最高のライブを届ければ提督さんも元気を出してくれるはずです!!」

金剛

「ゆめのアイディアに賛成ネ!差し支えなければ、私達も singer ソングに混ぜてください!!皆さんでテートクを救い出しまショウ!!」

ゆめ

「はい！喜んで！」

金剛

「そんでテートクとの結婚式を上げ直すネ！！」

ひなき

「金剛さんが元気になつて良かつたぜ！」

霧島

「（ご）心配をお掛けしました。」

いちゞ

「よーし！『提督さんを元気にしようスペシャルライブ』みんな張り切つっていくよー！」

艦娘、アイドル

「おー！！」

信長の救済手段が見つかった今、後は実行あるのみ、彼女達は早速準備に取り掛かろうとした。だがこの提案に反対する者達が出て來た。

光秀

「申し訳ありませんがその提案に反対させて貰います!!」

明智少佐であつた。

エルザ

「明智少佐。貴方の意見は却下します!」

光秀

「何故ですか!? 声ネタにしたことまだ根に持つてゐるんですか!?!?」

エルザ

「違います。」

エルザは反対する光秀を説得した。

エルザ

「ここには私を含め、アイカツランキンガ上位者の強者ばかりが集まっています。それでも私達の歌声は提督さんには届かないと？」

光秀

「話を聞く限り、それほど司令の精神状態が酷すぎるんです。最悪不発で終わってしまふ。どこぞの駆逐艦が司令に魚雷カツトインしなければ可能性はありましたが!!」

ヴェールヌイ

「全く誰だい？そんな可能性を奪つた駆逐艦は？迷惑もいいところだ。」

ヴェールヌイはそのまま倉庫の中に押し込められた。

光秀

「虹野殿には申し訳ありませんが、その提案に賛成する事は出来ません。どうかご了承下さい。」

ゆめ

「そんな。」

大鳳

「私もその提案には反対だね。」

大鳳も光秀同様反対だった。

ゆめ

「どうしてですか!?」

大鳳

「君の提案はあまりにも無意味だからさ。」

ローラ

「そこまで言わなくてもいいじゃないですか!?」

イヨク

「そうです大鳳殿！虹野殿の努力を無にする気ですか!?」

大鳳

「事実を言つてるまでだよ。」

光秀

「大鳳殿の言う通りです！それだけ司令のメンタル大破炎上！轟沈寸前なんですよ!!」

大鳳

「悪いけど君の意見と全く違うんだが？」

光秀

「はい!?」

長門

「どう言うことか説明しろ大鳳。」

大鳳

「君達のやろうとしてる事は、いわタイプのポケモン相手にでんきタイプのポケモンで挑もうとしているのと一緒さ。」

武藏

「何故ポケモンで例えた?」

長門

「あれだろ? アニメ20周年だからだろ?」

大鳳

「君達の歌声は提督には届かない。」

ゆめ

「そんなのやつてみなきやわからないじゃないですか！」

大鳳

「わかるさ。さつきも言つたとおり君達の歌声は提督には届かない。それは君達と相性が悪いからだよ。」

美月

「相性？」

大鳳

「どれだけ素敵な音色を奏でても、提督の心には響いているが、それで彼が戻るとは限らない。」

ゆめ

「じゃあどうしたらいいんですか!?」

大鳳

「簡単だよ。君達がやろうとしてた事の逆をやればいい。」

ゆめ

「逆？」

大鳳

「提督を喜ばせるのではなく、ショックを与えるんだ。」

それを聞いて光秀から一つの提案が思い浮かんだ。

光秀

「そうでしたか大鳳殿！なれば私に策がござります！」

大鳳

「聞かせて貰おうか？」

光秀

「出来ればこの手は使いたくなかったのですが背に腹には変えられません!! 艦娘一同全員提督に夜這いを!!」

大鳳

「却下。」

光秀

「え?」

その後、光秀は焼死体で発見された。

長門

「おい大淀。なぜあいつはクビにならない?」

大淀

「上層部に何度も問い合わせてはいますが『無理』の一点張りでした。」

大淀は光秀とイヨクを退職させようと上層部に報告を入れるのが日課になつてゐる。

イヨク

「全く明智少佐にも困つたものだ！ですが攻略法がわかつた今！このイヨク・クジヤン  
!!信長様を元に戻す秘策がござります!!」

大鳳

「斬殺されるのが目に見えてるが一様聞いておこう。」

イヨク

「あれ？制裁確定！？」

お決まりらしい。

イヨク

「ここは客人であるアイドルの皆様方に協力してもらい、信長様の部屋に忍び込み夜這

いを!!

エルザ

「謹んでお断りします。」

イヨク

「え？」

その後、無数の斧が突き刺さった遺体が見つかった。

エルザ

「なんであの人達クビにならないんですか？」

大淀

「さあ?」

結局イヨクも光秀と同じ作戦だつた。

長門

「大鳳。何かいい案はあるか？お前の事だから名案はあるのだろう？」

大鳳

「そうだね。いつその事みんな自沈しちゃおつか！」

長門

「は？」

大鳳の言っている事がわからなかつた。

大鳳

「私達艦娘が全員自沈する。この基地から艦娘がいなくなればいい。もちろん間宮さんと伊良湖ちゃんも含めてね。」

長門

「お前・・・本気で言つてるのか。」

大鳳

「本気で自沈するわけではないよ。そう言うシナリオだつて事さ。そして君達アイドルが泣きながら提督に訴えるんだ。「貴方の所為でみんな沈んだよ」 つて。」

大鳳の提案に誰もが震えた。賛成する者もいれば迷っている者もいた。

ゆめ

「私は嫌です！」

反対する者もいた。

ゆめ

「どうしてそんな酷いこと思いつくんですか!?ただでさえ提督さん傷ついてるのに、そんなどしたらもう立ち直れなくなっちゃいますよ!!」

大鳳

「君も言つてたではないか。「やつてみなければわからない」と？」

ゆめ

「そんな人を傷つけるやり方最低だと思います!!」

大鳳

「なんの根拠もなしに平和的解決策を提出する方が愚かだと思うよ。」

この時から、大鳳と虹野ゆめは険惡の関係になつていつた。

長門

「もはや手段は選べぬか。邪道な手ではあるが仕方ない提督を救うためだ。」

ゆめ

「長門さん!?」

長門

「皆心して掛かれ！我々は提督を救うため今から鬼となろう!!」

ゆめ

「そんな!!」

長門

「許せ虹野。時には非情を貫き通さねばらぬ覚悟も必要なのだ！」

陸奥

「長門それイヨク少佐のセリフ。」

だがゆめ以外、全員の決意は固かつた。

長門

「では多数決により大鳳の案を採用とする。作戦は明日マルナナマルマルに開始する。全員で提督を取り戻すぞ!!」

356 もはや声ネタである。

アイドル達

「はい！」

艦娘達

「了解!!」

信長

「いやそれやつたらワシ死んじやうからやめてええええ!!」

艦娘達

「ええええええ!! 提督ウウウ!!」

何故か信長が食堂の窓から顔を出してきたのだ。

隼鷹

「提督何してるので!!」

信長

「お前達の様子を見にきたのだ。そしたらとんでもない作戦思いつきおつて!! 何も知らずに実行してたらワシ廃人になつてたからね!!」

艦娘達もアイドル達も信長を見てぽかーんとしていた。

隼鷹

「提督?・元に戻つてる?」

信長

「そうらしいな。今本調子だ。」

それを聞いて全員大喜びした。

由良

「良かつたですね！ 提督さん！」

阿武隈

「由良ちゃん!?」

鬼怒

「ずっと提督と一緒にいたの!?」

由良

「うん！本当に間に合つて良かった。もう少し遅かつたら何も知らずに朝提督さんが大  
変な事になつた。」

阿武隈、鬼怒

「なんかごめん。」

間一髪であつた。

信長

「大鳳！貴様由良がいなかつた時点でワシが戻つて来る事最初からわかつていたな!?」

信長の間に全員大鳳の方に注目した。すると彼女はこう答えた。

大鳳

「私の発案したこの作戦に最初から意味があつたと思うのかい？」

艦娘達

「大鳳おおおお!!」

ゆめ

「私やつぱりわたし大鳳さんのこと大ツ嫌いです!!」

大鳳

「私もオムツも取れていらない温室育ちのお花ちゃんに用はないよ。」

信長

「何をムキになつてゐんだこいつらは?」

無事に事件は解決し、信長は由良と共に食堂に入り、皆んなに謝罪した。

信長

「皆心配を掛けてすまなかつた。だがもう立ち止まるのはやめた!これからはお前達と共に前へ進む!」

隼鷹

「それは何よりだけど私たちの作戦会議どつから見てたの?」

信長

「ちようど「吹雪と!大淀と!美月と!エルザの!抜錨!私達の提督を取り戻せ作戦會議!!イエー!!」辺りからだ。」

隼鷹

「最初からじやん!!」

信長

「てかMC供！仕事したのオープニングだけかい!?」

吹雪、大淀、美月、エルザ

「すいませ〜ん。」

信長も由良のおかげで無事に元に戻りこうして一同解散した。

翔鶴

「良かったですね大鳳さん。貴方の思惑通りに提督が元に戻つて。」

大鳳

「なんの事だい？」

翔鶴

「とぼけても無駄ですよ。由良さんが提督のところに行つた時から確信していた。彼女

なら提督を取り戻せると。だからゆめちゃんの案を否定したのよね？そんなことしなくとも提督は帰つて来るつて。」

瑞鶴

「あんたそんなんことまでお見通しだつたの？」

大鳳

「いや、正直彼女の提案には驚いたよ。あまりにも無意味な事をしようとしていたからね。」

瑞鶴

「なんであんたゆめに冷たい態度とつてるのよ？あの子のこと嫌いなの？」

大鳳

「己が野望を叶えなければ、己の信念を殺して先に進め。」

瑞鶴

「は？」

大鳳

「このアイカツ合宿で、彼女には残酷な現実に立ち向かう強さを手に入れて欲しい。なら私が悪役を買って出た方が都合がいいからだ。」

この大鳳の行動が虹野ゆめに何をもたらすのか。次回！いよいよ夏イベ「西方再打通！欧州救援作戦」海戦！！

瑞鶴

「すっかり忘れてたけど来月イベントだつたつけ!?」

大規模作戦

続く。

# 信長最大の危機!?西方再打通！歐州救援作戦!!

八月。イベント前日、佐世保鎮守府はいつもより慌ただしかった。

ゆめ、ローラ

「アイカツ！アイカツ！アイカツ！」

虹野ゆめと桜庭ローラがランニング中に資材庫を訪れた時だつた。

伊勢

「日向！そつちはどう!?」

日向

「問題ない。心配なのは燃料と弾薬だけだ。」

航空戦艦の伊勢と日向は、イベントに必要な物資の最終確認をしていた。

ゆめ

「伊勢さん！ 日向さん！ お疲れ様です！」

伊勢

「ゆめちゃんにローラちゃん！ お疲れ！」

日向

「走り込みか？」

ゆめ

「はい！ お二人は？」

日向

「明日の作戦に必要な資材の確認だ。」

伊勢

「鋼材、ボーキサイト、高速修復材OK  
！」

日向

「伊良子最中と間宮アイスも問題ないな。」

ローラ

「モナカとアイスって必要ですか?」

日向

「私達艦娘の疲労回復の為には絶対必要なんだ。」

もはや必需品である。

伊勢

「あとは提督の茶菓子と飲み物ぐらいか。」

ゆめ

「それいりませんよね?」

伊勢

「私もそう思う。」

これは各提督の自由である。

日向

「問題は燃料と弾薬か。」

伊勢

「前段作戦攻略まで保てばいいけど。」

ゆめ

「こんなにたくさんあるのに?」

日向

「まあな。 戦艦や空母があらかた食い尽くすからな。」

ローラ

「食べ物じやないですよ?」

日向

「似たようなものだろ?」

大鳳

「そこで何をしているんだい。」

すると大鳳も資材庫を訪ねてきた。

大鳳

「ここは関係者以外立ち入り禁止だよ。早く立ち去りたまえ。」

するとゆめは大鳳を見て不機嫌になつた。

ゆめ

「ローラー！ 行こう！」

ローラ

「ちよつと！ ゆめ！？」

二人は何処かに行つてしまつた

日向

「まだあの子と仲直りしてないのか？」

大鳳

「何故そういう必要があるんだい？」

日向

「その気もなしか。今和解しないと後悔するぞ。明日の作戦で轟沈するかもしれないからな。」

大鳳

「その時はその時だよ。」

そして当日、イベント『西方再打通！歐州救援作戦』が開始された。

山城、五十鈴

「で？また前回と同じメンバー!?」

信長

「いやだつて最初の海域のボス潜水艦だし。」

リンガ泊地攻略作戦『再打通作戦発動』の艦隊は、暁、ベールヌイ、電、雷、山城、五十鈴と前回と同じ艦隊編成で出撃し、作戦完了。

山城

「こりや当分出番ないかな。」

次の海域は通常海域でも出撃しているカレー洋リランカ沖だつた。『リランカを超えて』その攻略艦隊は、比叡、那智、由良、吹雪、蒼龍、祥鳳だったが、この艦隊、かつては伝説の艦隊と呼ばれていた。

比叡

「懐かしいですね！」

那智

「またこの面子で組む事になるとはな！」

由良

「他の艦娘の皆さんとの育成もあつて解散しましたけど、またこの艦隊で戦えるなんて嬉しいです！」

信長

「久々の旧第一主力艦隊での出撃だが問題ないな。」

蒼龍

「いやでも『伝説の艦隊』って所詮オリヨルク（オリヨール海クルージングの略）止まりの『即席艦隊』よ！そんな大袈裟なかものじやないから!!」

信長

「笑う事ないだろ!?別にいいじやん！カツコつけたつて！」

佐世保鎮守府がまだ戦力不足だつたころ、当時の第一主力艦隊が旗艦比叡を初め、山城、蒼龍、那智、由良、吹雪のメンバーだつた。

祥鳳

「蒼龍さんが来る前は私が艦隊に入つていました。」

そして艦隊は出撃し、無事にリランカ沖は攻略した。

信長

「さて次はステビア海か。ここからは難航するかもな。」

『ステビア海』の攻略は輸送と殲滅の二つの作戦で進行した。輸送部隊は鬼怒、如月、睦月、飛鷹、隼鷹、初月、ビスマルク、阿武隈、北上、大井、島風、秋月を、殲滅部隊には、ウォースパイト、ガングート、摩耶、赤城、加賀、初月、ビスマルク、阿武隈、北上、大井、夕立、時雨を、支援艦隊には金剛、榛名、千歳、千代田、浦波、江風が出撃した。

そして信長が予想した通り、作戦攻略は難航していた。

熊野

「提督。あなたは聖杯艦隊指揮大戦のルールに反しています。」

信長

「はあ!? (F a t e / A p o c r y p h a !?)」

エルザ

「私と熊野さんの悲願を貴方の野望のために利用したと言うの!? こんな行いが許されるはずがない!!」

信長

「ひい!? (戦姫絶唱シンフォギア!?しかもG!?)」

美月

『ヴァラルの呪詛』から人々を開放するために熊野さんは戦っていた。なのにこんな非道な行いが貴方のやり方が統制局長!!』

信長

「ふう!? (統制局長!? 実はAXZだった!?)」

大淀

「これも全て・・・罰だつたと言うのか。」

信長

「へ？（…）にきて Fate／Zero?（…）」

堀川

「ごめん主人さん。僕に出来る事つてこれくらいしかなかつたから。」

信長

「堀川。お前なんで鎮守府にいるの？」

堀川

「僕の名前で『ほ』を使うの！？」

だが難航してたのは信長だふけだつた。

大淀

「提督。皆さん何故怒っているかわかりますか。」

信長

「その前にワシから言う事がある。」

大淀

「こつちの話無視かよ!?」

信長

「まず熊野だがワシは前に言つたはずだぞ。先にビスマルクを改造するとな!」

熊野

「ですが先月ご自分が何を言つたかご存知で?」

信長

「え？ ワシ何を言つたの？」

熊野

「ビスマルクさんに改造設計図を使用する代わりに今回のイベン大規模作戦ト出撃させないと言つていましたわよね？ 結局艦隊に入れてるじやねーかあ！！」

信長

「言つた記憶ないんだが？」

大淀

「まあ提督が放心状態の時に言つていましたからね。」

信長

「放心状態のワシそんな事言つてたの？」

言つていました。

美月、エルザ

「そんな理由で誰が納得するとお思いか!!」

信長

「そこの二人はなんでさつきからシンフォギア口調なの!?もう美月&エルザじやなくてサンジエルマン&マリアになつてんだけど!?」

美月

「他人の空似だ!!森羅万象!この世界に同一人物などありえん話だ!!」

エルザ

「それでも私達の存在を否定するなら、それは貴方の愚かな幻想よ!!」

信長

「同一人物や幻想じやなくてただの丸パクリ!!てかなんでアイドルが艦隊指揮に口挟んでんだあああああ!!」

光秀、イヨク

(司令! それ先月我々がツツコミましたあああああ!!)

あろう事が熊野は神崎美月までも味方につけて、信長を説得しようとしていた。ところで皆さんお気づきでしようか。知らない人が混じってるのですが?

堀川

「いい加減にしてよ!! 主人さんだつてみんなのために考えてるんだよ!? それなのに勝手すぎるよ!! このままじゃ主人さん爆発するよ!!」

信長

「だからなんでオメエは鎮守府にいるんだあああああ!!」

光秀、イヨク

(あんたの所為で爆発したあああああ!!)

美月、エルザ

「てかあなた誰?」

では紹介してもらいましょう。

堀川

「僕は堀川国広。前の主人だつた新撰組副長土方歳三の愛刀の刀剣男子です。いつも主人さんがお世話になっています。」

『刀剣乱舞』に登場する堀川国広は刀剣男子である。彼等の役目は歴史改変を目論む歴史修正主義者達『時間差遡行軍』から歴史を守るのが仕事だ。『深海淒艦』同様『時間差遡行軍』もまた目的は不明。だが刀剣達は日夜戦い続けている。

信長

「で?お前は何しにここへきた?」

堀川

「それなんだけど。」

その時だつた。

和泉守、城和泉

「主人いいいいいいいい!!」

信長

「ドアを蹴り飛ばすなあああああ!!」

光秀、イヨク

「またなんか來たあああああ!!」

二人の人物が提督室のドアを蹴り飛ばして入つてきた。

信長

「城和泉！和泉守！お前達何しにここへ來た!!」

和泉守

「決まってるだろ！なかなか本丸に来ねーから迎えに来たんだよ!!」

城和泉

「『めいじ館』放つたらかしてこんなところで何してるのよ！·さっさと帰るわよ!!てか！」

和泉守、城和泉

「さつきから主人連れて行こうとしているこいつ誰!?」

大淀

「こっちのセリフだボケエ!!」

信長

「お互い挨拶してなかつたのか？」

突然提督室に入つて來た内の人一人は刀剣男子の『和泉守兼定』。信長の補佐役即ち艦

これで言う所の秘書艦のような役職だ。彼も堀川と同じ土方歳三の愛刀で良くコンビで行動する事が多い。

そしてもう一人は『城和泉正宗』と言う少女で、刀剣から誕生した『巫剣』と呼ばれている彼女たちは、人間の負の感情から生まれる『禍憑』まがつきを倒すのが役目である。だがそれには『巫剣使い』と呼ばれる人間が必要だ。それが信長と城和泉の関係でさらに和泉守同様補佐役でもある。

ちなみにこの二人だけではなく、本丸からは和泉守兼定や堀川国広を始め『大和守安定』『加州清光』『陸奥守吉行』『薬研藤四郎』の第1部隊。めいじ館からは、城和泉正宗を始め、『牛王吉光』『桑名江』も来ていた。今は全員食堂で艦娘達やアイドル達に自己紹介をしている。

ちなみに信長と彼らの関係は上司と部下に当たる。信長は佐世保鎮守府を始め『本丸』や『めいじ館』など、各地に様々な組織を運営している。五話に登場したスクールガールストライカーズの『五稜館学園』もその一つだ。

説明も終わった事で、信長は二人に佐世保鎮守府での事情を説明した。

信長

「と言うわけだ。だからしばらくは顔を出せん。」

城和泉

「そんなん。」

和泉守

「そ、うか。なら仕方ないな。こつちは期間限定で『小竜景光』が鍛刀出来るんだが?」

鈴谷

「鍛刀つてなに?」

信長

「お前達で言う所の建造のようなものだ。」

刀剣乱舞のシステムは艦これと同じである。

ウォースパイク

「で、話は終わつたかしら？」

信長

「ウォースパイク達か。いつの間に戻つていた？」

ビスマルク

「熊野議員がF a t e / A p o c r y p h a 始めた辺りよ!! てかネタ殆ど土曜深夜のB S 1 1 のA N I M E +じやないの!!」

ガングート

「レクリエイターズとひなろじ出てないけどな。」

いつの間にか作戦完了で艦隊帰投し、ステビア海は無事に攻略した。

信長

「次は『紅海』か。これを攻略すれば前段作戦は終了か。」

『遙かなるスエズ』作戦が発動。最初の第一殲滅攻略艦隊の機動部隊から摩耶、初月、陸奥、翔鶴、瑞鶴、大鳳、ビスマルク、阿武隈、北上、大井、朝潮、荒潮が出撃し、第二殲滅攻略艦隊の水上部隊に摩耶、初月、金剛、榛名、隼鷹、飛鷹、ビスマルク、阿武隈、北上、大井、朝潮、荒潮と支援艦隊に長門、大和、千歳、千代田、江風、浦波が出撃したが攻略に2日は掛かつてしまつた。

信長

「いよいよ後段作戦か。このまま攻略するぞ。」

「地中海の誘い」作戦は、水上部隊にウオースパイト、ガングート、翔鶴、瑞鶴、摩耶、秋月を出撃させ、地中海キプロス島沖を攻略した。

信長

「このくらいは余裕だ。」

だが次のマルタ島沖でその勢いは一気に失われた。

信長

「輸送ゲージ全然減らねえ。」

地中海マルタ島沖にて「マルタ島沖海戦」作戦が発動した。その輸送作戦攻略艦隊に金剛、大鳳、鳥海、摩耶、霞、大潮、ビスマルク、阿武隈、大井、北上、夕立、時雨だつたが思ったよりも難航していた。2日ほど遅れての殲滅攻略艦隊に取り掛かり、ガングート、ウォースパイト、ビスマルク、大鳳、鳥海、摩耶、榛名、阿武隈、北上、大井、夕立、時雨にて作戦は完了した。

信長

「やつと最終海域か。思つた以上に予定が狂つてしまつた。」

吹雪

「もう一週間以上が経過していますから、遅れを取り戻さないといけませんね！」

信長

「これ以上長引かせるわけにはいかん。情報によれば最終海域にてグラーフ・ツエッペリンが目撃されている。さらに新たな綾波型駆逐艦や折損の姉妹艦も出現している。さつさと終わらせて一狩り行くぞ!!」

吹雪

「モンハンじゃねーよ!!これ艦これだよ!!」

最終海域は北大西洋海域ドーバー海峡であった。まず最短ルートやギミック解除のための艦隊を編成し、見事に条件をクリアし、主力を出撃させた。機動部隊には摩耶、武藏、翔鶴、瑞鶴、大鳳、千歳、阿武隈、榛名、北上、大井、睦月、夕立、前衛支援艦隊にはウオースパイト、ビスマルク、ガングート、龍驤、レーベ、マツクス、艦隊決戦支援艦隊には長門、大和、金剛、千代田、島風、不知火だった。

だがこの海域は信長が予想してた以上にマジパナイ!!

信長

「よし！マジパナイってことは簡単だな!!」

だが艦隊が帰投し、敵艦隊を撃破しきれなかつたのか、信長達は深刻そうな顔をしていた。

信長

「ご苦労だつた。下がつて良い。」

摩耶達は暗い雰囲気で提督室を出た。

信長

「この海域ボスだらけじゃねーかあ!!こんななんどうやつてクリアするんだよお!?!」

光秀、イヨク

(司令が荒れてる!?)

その事実を知つて機嫌が悪かつたのは信長だけではなかつた。

摩耶、武藏、翔鶴、瑞鶴、千歳、阿武隈、榛名、北上、大井、睦月、夕立、ウオース  
パイト、ビスマルク、ガングート、龍驤、レーベ、マックス、長門、大和、金剛、千代  
田、島風

「この海域ボスだらけじゃねーかあ!!」

熊野

「うわあ・・・行かなくて正解でしたわ。」

鈴谷

「ちよい熊野。調子良すぎ。」

食堂にいた攻略艦隊並びに支援艦隊、決戦支援艦隊の艦娘達も荒れていた。

いちご

「どうかしたんですか?」

騒ぎを聞きつけ、星宮いちご、霧矢あおい、紫吹蘭の三人が、食堂に入つて來た。

鈴谷

「作戦も最終海域まで來たんだけど、ちょっと問題があつてね。」

あおい

「そう言えば今日でしたよね！結果どうでした？」

鈴谷

「いや、それが話に聞いた所、出て來た敵がみんな ボスだつたんだつて！」

いちご、あおい、蘭

「え？」

彼女たちは鈴谷の言つている事がわからなかつた。

いちご

「えーっと・・・ラスボスのステージなのにボスがいたんですか?」

蘭

「話ややこしくなるから黙つとけ!」

鈴谷

「んじやあ大鳳つち!後よろしく!!」

大鳳

「やれやれ。」

そこで直接現場を見て來た大鳳に説明してもらつた。

大鳳

「私達は言わばチャンピオンロードに挑戦していたのさ。」

蘭

「なんでポケモンで例えたんですか？」

あおい

「決まっているわ。20周年だからよ！」

蘭

「そう言うものか？」

アニメポケモン20周年だからである。

大鳳

「道中には四天王、そしてその奥地にはチャンピオンがいる。私達はそのチャンピオンに挑戦したんだよ。」

いちご

「それならわかりやすい！」

あおい

「攻略できそうですか?」

大鳳

「難しいね。なんせチャンピオンより四天王が強いから。長引きそうだよ。」

いちご

「大変そうですね。」

大鳳

「だからしばらくは艦娘達と提督に声を掛けない方がいい。」

いちご

「どうしてですか?」

大鳳

【大規模作戦】

「イベント中は家の鎮守府は荒れるんだ。恐らく一波乱ありそうだよ。」

大鳳の言う通り作戦は進行せず、無駄に資源、資材、高速修復剤、甘味、時間、提督のポケットマネーだけが無駄に消費していった。そんな状況下である事件が起きた。

和泉守

「国広!？」

堀川

「ようやく来たね兼さん。」

夜遅く、何故か人気のない提督室に堀川の姿があつた。彼がいないことを知った和泉守は嫌な予感がし、提督室に向かい堀川を見つけた。

和泉守

「お前、自分何をしてるのかわかつてるとのか。」

堀川

「僕にはこれくらいしか出来ないから。」

和泉守

「それは主人の命令に背く行為だ。今ならまだ間に合う。それをこつちに渡せ。」

堀川

「兼さんは、このまま主人さんがどうなつてもいいって言うの。」

和泉守

「それは主人が決める事だ。俺たちが口を挟んでいい事じやない。」

堀川

「けど主人さんが本丸にいない今、僕等にだつて出来る事はあるはずだよ!?!」

和泉守

「お前・・・。」

堀川

「主人さんの命令がなくともいい、僕等の出来る事を精一杯やればいいじゃないか!!それがわからない兼さんじやないだろ!!」

その時だつた。

陸奥守

「和泉守！堀川！おまんら何しようとか!?」

陸奥守も和泉守同様嫌な予感がし、提督室に駆け込んで来たのだ。

堀川

「兼さん、決めるなら今だよ。」

堀川の説得に、和泉守は答えた。

和泉守

「そこまで言うんなら、お前の持つてるそれ主人の物だろう?こいつは俺が預かる。一緒に主人に怒られようぜ。」

堀川

「兼さん!」

その時だった。

陸奥守

「和泉守いいいい!!待てやああああ!!」

陸奥守は信長の私物を持つていた和泉守の手を掴み、その物を取り上げようとしていた。

陸奥守

「それ主人のクレジットカードやろ?!何勝手に使おうとしどんのや!!」

和泉守

「離せ陸奥守！もう決めた事だ！」

陸奥守

「おま!? 主人に怒られるだけやのうてこここの艦娘共にへし折られるかもしけんのやぞ!!  
それに巫剣の嬢ちゃん達に見つかつたらえらい面倒に!!」

城和泉

「ちよつとあんた達！主人の仕事部屋で何してるの!!」

陸奥守

「言うちよる側から来よつた!!」

陸奥守の予感は的中し、城和泉も提督室に入つて來た。

城和泉

「ちよつとそれ主人のクレジットカードじゃないの!? 何勝手に使おうとしてるの!!」

和泉守

「悪いな城和泉正宗! こいつは俺たちが貰っていく!」

城和泉

「そんな事させないわ!!」

城和泉も和泉守の持っていたクレジットカードを掴んだ。

城和泉

「これは私達が使うのよ! 渡しなさい!!」

陸奥守

「おまんもかあ!?」

城和泉

「当たり前でしょ!! これでガチャ回しまくつて小鳥丸出すんだから!!」

陸奥守

「やめんかあ!! ほんましばかれるぞ?!」

川内

「そんなことよりこれ使って夜戦しよう!!」

和泉守、陸奥守、堀川、城和泉

「いや誰え?!」

信長のクレジットカードを取り合っていたその時だった。

リリイ

「貴方方はこんな夜中に何を騒いでいるのですか。」

和泉守、陸奥守、堀川、城和泉、川内

「あつ。どうも。」

四ツ星学園の白銀リリイが信長のクレジットカードを奪い合っている和泉守達を睨みつけていた。彼等があまりに騒ぎ過ぎたため、怒っているのだ。

リリイ

「全員そこに座りなさい!!」

と、彼女の言われるままに正座させられるも、和泉守達は見苦しい言い訳をして説明した。

リリイ

「それで揉めていたと言うわけですか。」

和泉守

「わかつてくれ白銀リリイ。俺たちは主人のためにしようとしたことだ。責められる筋合ひは無い。」

リリイ

「でもクレジットカードを使うのは提督さんであつて貴方方ではありませんよね？」

和泉守

「はい、仰る通りです。すいませんでした。」

和泉守がリリイに謝つていると、陸奥守が突然割り込んで來た。

陸奥守

「ちよつとええか嬢ちゃん。」

リリイ

「なんでしょうか？」

陸奥守

「嬢ちゃん芸者さんじやろ？こんな遅くまで起きててええんか？」

この時全員がこう思つた。今の彼女に一番言つてはならない事を。

陸奥守

「夜更かしはお肌の天敵言うやさかい早よ寝な。」

ブチツ!!

リリイ

「誰の所為だと思つてるんですかああああああ!!」

その後、白銀リリイの説教は朝まで続いた。

信長

「何してんのおおおお!?」

信長が鎮守府に着任した時、その光景を見てかなり驚いていた。その後、彼女は急に

貧血で倒れてしまつた。白銀リリイは元々身体が弱いにもかかわらず時々無茶をする事がある。信長は四ツ星学園の虹野ゆめ達から用心するよう言われていたが今回の件を聞きつけ、彼女達は提督室に駆けつけた。

ゆめ

「提督さん。」

信長

「はい。」

ゆめ

「なんで私達が怒つてるかわかりますよね？」

虹野ゆめ、桜庭口一ラ、早乙女あこ、香澄真昼は不機嫌そうに信長を睨んでいた。

口一ラ

「なんであんな事になつてたんですか？」

あこ

「聞けば刀剣勇士と巫剣達がリリイ先輩にご迷惑をお掛けしたとか?」

真昼

「その所為でリリイ先輩を一晩中付き合わされて倒れたんですよ? 幸い今日はオフだつたからいいものの!」

ゆめ

「どう言う事か説明して貰えますか?」

信長

「家の刀剣共がご迷惑をお掛けしましたあ!!」

棒切れ

その後2時間くらい続いたとされる。

加州

「そんで主人は朝食も取らずひたすら業務に勤しんでいましたとさ。めでたしめでたし。」

大和守

「めでたくもないし、他人事だよ清光。」

その頃、食堂では本丸の第一部隊の刀剣達とめいじ館の巫剣達が昨晩の件で話し合っていた。

牛王

「それで城和泉達はどうしてるんだい？」

薬研

「城和泉は第三主力艦隊の宿舎の空き部屋で熟睡中。和泉守達はあそこだ。」

薬研の指す方を見てみると和泉守達がいた。

和泉守

「イダダダダダダダだ!!!」

長門

「お前らの所為で大事な客人から病人が出たんだぞ! どう責任を取るつもりだ!!」

陸奥守

「てかなんでわしと和泉守だけコブラツイスト!?」

金剛

「この大事な時期になんて事してくれたデスカ!!」

堀川

「ちよつと陸奥さん!? なんで僕だけアイアンクロー!? しかも持ち上がりつちやつてるし  
!!」

陸奥

「聞けば堀川くんが原因らしいじゃない？どう言う事かお姉さん達に説明してもらえるかしら？」

長門達艦娘とじやれ合っていた。

牛王

「何をしてるんだい？彼等は？」

桑名江

「じゃれ合つて いるように見えますが？」

加州

「本当呑氣だよな。」

大和守

「少しは反省して欲しいよ。」

薬研

「気のせいか俺にはじやれ合っているよりシバかれてるよう見えるが?」

他人事のように見る彼等であつた。

吹雪

「ちよつと加州くん達も他人事だと思つてゐるけど堀川くん達止めなかつた皆んなも悪いんだからね!」

すると吹雪が彼等のところに訪ねてきた。

加州

「何言つてんのさ吹雪。和泉守達が主人のクレジットカード勝手に使おうとしたのが悪いんだろう? だつたら自業自得だよ。」

桑名江

「あの。吹雪さんと加州くんつてお知り合いなんですか?」

吹雪

「はい！前に司令官に本丸に連れてつて貰った時、加州くんと初めて会ったんです！あともう一人ぼつ切り長谷部さんにも会いました！」

加州

「へし切長谷部な。名前間違えないでよ。」

吹雪

「ごめん！なんかへし折れてる名前だつたから。」

加州

「あのな！へし切長谷部の由来は、前に主人を怒らせた茶坊主が戸棚に隠れたところを、主人自ら隙間からぶつ刺して茶坊主殺した事から名付けられたんだから。ちゃんと覚えてよね！」

牛王

「それで覚えたくないな。」

桑名江

「しかもやつたの主人様では無くて織田信長本人ですよね?」

と何事も無かつたように見えるが、刀剣乱舞と天華百剣にも課金が発生していたため、クレジットカードの上限越えで使用不能になつていた。

信長

「なんだとお!?」

その状態で作戦を遂行するも状況は変化せず、信長と艦娘達の疲労は溜まつてく一方であつたが、それは彼等だけではなかつた。

歐州淒姫

「オマエラマイカイカソタインゼンメツサセテ、ワタシダケタイハノママノコスノハイイケド、ナンカイオナジコトヲクリカエスンダア!! イジメカコレ!?」

摩耶

「お前がトドメ刺させてくれねーからだろ!!」

北上

「また夜戦カツト失敗した〜。」

大井

「次会つたら北上さんの分までボコボコにしてあげるから覚悟しなさい!!」

欧洲凄姫

「ニドトクルナ!!」

深海凄艦も嫌気が刺していた。作戦は進展しないままある事件が起きた。

「こころ

「いくらなんでも酷すぎます!!」

ひかり

「これじや艦娘のみんなが可哀想だよ!!」

のぞみ

「提督さん。労働基準法って知つてますか?」

何故か『かみさまみならいヒミツのこことま』の四葉こころ、桜井のぞみ、蝶野ひかりのこことま契約者三人と、ラキたま、ビビット、ライチ達ことまが信長に猛抗議していた。連れてきたのは彼女達だつた。

信長

「お前らなに熊野みたいなことしてんのだあ!!」

ガングート

「黙れ!!こんな重労働ソ連時代でもなかつたぞ!!てか日本兵を捕虜にしてこき使つてた時より酷いぞ!!」

ビスマルク

「ヒトラーでもこんな酷いことしなかつたわよ!! そんなんだから日本人働きすぎって言  
われるのよ!!」

信長

「日本全国これが普通なの!! てかウォースパイト！ 艦隊旗艦のお前が何故止めなかつた  
!!」

ウォースパイト

「勿論、私がOKしたからです。」

信長

「だからなんで!?」

ウォースパイト

「トップハムハット卿ですらここまでこき使いませんでした!!」

信長

「きかんしやトーマスじやねーよ!!」

「こころ、のぞみ、ひかり

「提督さん!!」

信長

「はい!すいませんでした!!」

龍驤

「提督、自分小学生に怒られて虚しゅうないんかい?」

連れてきたのはウオースパイト率いる前衛支援艦隊だつた。作戦帰投中にたまたま立ち寄った島でガングートはこころとの再会を始め、彼女の友人の桜井のぞみ、蝶野ひかりと出会つていた。事の事情を説明したところ、やはり許せないとこころがあつたのか一緒に信長を抗議しようと考えたらしい。

マツクス

「ところでまた一般人基地内に入れてるけど大丈夫なの？」

レーベ

「提督もその設定忘れてるんじゃない？」

だがそんな状況化でも、嬉しい事もあつた。

阿武隈

「提督♪♪本日は軽巡阿武隈を使って頂きありがとうございます！」

信長

「お~い、その流れだと「メロンです。請求書です。」とか言い出すんじゃないんだろうな？」

阿武隈

「メロンです。婚姻届です。指輪です。」

信長  
「へ？」

阿武隈

「提督！結婚してください!!」

信長

「すまん阿武隈。指輪は渡すから、式は作戦が終わってからにして。」

阿武隈

「オ～ア～ズウ～ケエ～!?」

阿武隈がケツコンカッコカリした事である。さらにはこの人からも吉報があつた。

熊野

「オホホホホ！ついに私の時代がきましてよ!!」

熊野がようやく改二になつたのだ。

美月

「おめでとう！熊野議員！」

エルザ

「おめでとう！ミス熊野議員！これで次の選挙もパーフェクトで当選よ！」

熊野

「あのすいません。さつきから議員つて何ですか？私立候補するつもりもありませんし、何故そう呼ばれるのですか？」

きらら

「艦娘のみんなそう呼んでるよ？」

レイ

「少なくとも私達がこの鎮守府に来た時から呼ばれているが、違うのかい?」

熊野

「初耳でしてよ?誰がそんな噂を?」

鈴谷

「熊野議員。10話目見ればわかるよ。」

熊野

「鈴谷。あなたもですの?」

熊野の改二を祝つて、ヴィーナスアークのエルザ、レイ、きららと美月とみくるも呼んでお祝いアフタヌーンティーを楽しんでいた。

エルザ

「それにして驚いたわ。ジャパンのスピーチは暴言、暴力だけで支持を集めてしま

まうのね。」

鈴谷

「エルザちゃん！あれ世間に恥晒してただけだからね!!違うからね!!」

日本の選挙活動はそんな野蛮なものではありません。

熊野

「エルザさんと美月さんには本当に感謝しています。お二人には「シンフォギア奏者」の資格を与えましょう。」

美月、エルザ

「全力でお断りします。」

鈴谷

「そ、うだよ、ねーーー！深夜アニメに出るならもうちよいおっぱいデカくしてからじゃないとー！」

ドンツ!

美月

「ねえ鈴谷?」

エルザ

「今何か仰つたからしら?」

鈴谷

「えーと感に触つたんなら謝ります。とりあえず二人共テーブルから足どかそうか。マ  
ナー悪いし。その手に持つてる斧も置こうか。危ないから。てかもう殺氣<sup>やるき</sup>まんまだ  
よね!」

美月、エルザ

「殺氣<sup>やるき</sup>まんますが何か?」

鈴谷

「ちょッ!! これマジヤバすぎ・・・。みくる達も見てないで二人止めて!!」

みくる、レイ、きらら

「は?」

鈴谷

「ギヤアアアアアア!!! こつちもキレてた!!」

みくる

「ねえ鈴谷つち。」

鈴谷

「はい。」

みくる

「私達アイカツ組にそれタブーだから。」

鈴谷

「やっぱ胸のこと気にしてたの!? てか今時のアイドルって斧持つの流行ってるの?!」

熊野

「鈴谷つたら今の失言でしてよ。」

鈴谷

「ちょッ!? 熊野見てないで助けて!! みくる達まで斧持ち始めて撲殺されそうなんだけど!!」

熊野

「ごめんあそばせ。これから入渠しなければならないので。全身エステ、最上級コースでお願いします!!」

その後、熊野がさらに贅沢を要求して来たのは言うまでもない。

信長

「やっぱ改造するんじやなかつた!!」

そして9月を過ぎ、作戦期日が残り1日となつてしまつた。

信長

「仕方あるまい。艦隊を再編成する。」

イヨク

「無茶です信長様!! もう後がないこの状態でそんな博打みたいな事したら取り返しがつきません!!」

信長

「それこそこのままいけば作戦は失敗に终わり、全てが無駄になる! それに編成するのはほんの一部だ。」

光秀

「一体誰を?」

信長から再編成で導入する艦娘が発表された。

信長

「第一艦隊から武藏を外して、比叡と交代し、第二艦隊から阿武隈、大井、北上を外す。」

光秀

「重要な重雷装巡洋艦を二隻も外すんですか!?しかも甲標的を積める阿武隈殿もですか!?

信長

「バカ光め、甲標的が積めるのはあいつらだけではない!」

光秀

「へえ!? (ば・・・・バカ光!)」

信長

「第一艦隊に比叡！そして第二艦隊には鳥海、由良、木曾だ！」

連合艦隊を再び再編成し出撃し、そしてラスボスマスで最終決戦を迎えた。

木曾

「お前らの指揮官は無能だな！」

歐州淒姫

「コツチノセリフダボケエ!!」

木曾の活躍で歐州淵姫を轟沈し、作戦は完了した。

大淀

「提督！歐州淵姫の轟沈を確認！作戦完了だとのことです!!」

信長

「よつしやあ!!」

さらに吉報が届いた。

大淀

「摩耶さんより入電! グラーフ・ツェッペリンを発見したとのことです!!」

信長

「よつしやあ!! 今回のイベント大勝利!!  
大規模作戦

曙

「そんなわけないでしようが!! このアホ提督!!」

敷波

「天霧と狭霧来てないよ?」

こうして長きに渡るイベントは終了した。

だがその日の夜だった。

ゆめ

「急がないと遅れちゃう！」

虹野ゆめが次の仕事に行こうと廊下を移動していた時、大鳳が壁に寄りかかってる姿を見た。

ゆめ

「大鳳さん？ 大丈夫ですか？」

大鳳

「気にしないでくれ。少し疲れただけさ。それより君は行かなくていいのかい？ まあどうせ路上ライブかなんかだと思うけど。」

ゆめ

「もう知らない!!」

彼女は怒つて仕事に向かつた。

大鳳

（そ、うだ。そ、れでいい。芸能界は群雄割拠の戦国時代。他人を相手にしている暇はないのだから。あれ・・・・・意識が薄れて・・・・・）

大鳳はそのまま倒れたと言う。

大鳳

「あれ? 私は?」

目を覚ますと、そこは大鳳の部屋だった。

信長

「やつと目を覚ましたか、この馬鹿者が。」

大鳳

「提督？ 私はどうしたんだ？」

信長

「たまたま取り掛かつた者が救援要請を出してくれてな。今回入ってきたばかりの艦娘達の活躍で無事に救助されたのだ。」

大鳳

「そうか。私としたことが倒れてしまうとは。」

信長

「いや。リランカ島沖からずつと出撃させっぱなしだったからな。お前の疲労に気づけなかつたワシにも責任はある。」

大鳳

「君が気にすることはないのに。」

信長

「とにかくだ。虹野ゆめにお礼を言つとけ。」

そう言うと、信長は席を外して何処かに行つてしまい、信長とすれ違うように代わりに虹野ゆめが入ってきた。

ゆめ

「大鳳さん。」

大鳳

「やはり君だつたか。」

ゆめ

「提督さんから聞きました。私のためにわざと意地悪していたんですよね。」

大鳳

「君はあまりにも周りに気を配りすぎて、自分の事に力を入れていない。だから嫌われ役を買つて出たんだが、どうやら余計なお節介だつたようだ。」

ゆめ

「大鳳さんも私と同じじゃないですか。」

大鳳

「私と？」

ゆめ

「周りに気を配りすぎて、熱を出して寝込んでるじゃないですか。」

大鳳

「それを言われたら流石に言い返せないね。」

すると大鳳は仲直りの握手を交わした。

大鳳

「君のファンになつてもいいかい?」

ゆめ

「はい!喜んで!!」

だいぶ遅くなつてしまつたが、二人に友情が芽生えた瞬間だつた。

信長

「・・・・・。」

そのころ、提督室に戻つた信長は真っ白になつていた。

明石

「提督どうかしたの?」

大淀

「今月分のクレジットカードの請求書が来たのですが額がデカすぎて提督真っ白になつてゐるんです。」

明石

「え!? 大丈夫なの!?」

大淀

「大丈夫じやありませんね。しばらくは無一文の生活です。あつ！ 私達は普通に生活で  
きますよ！」

続く。